

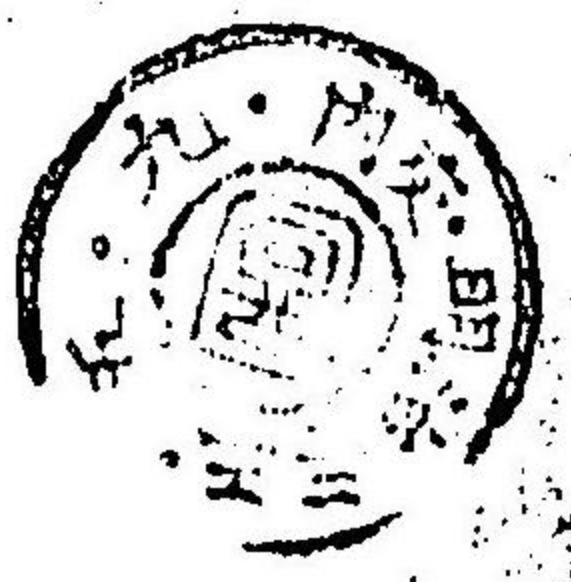
82-454

文學士久保天隨著

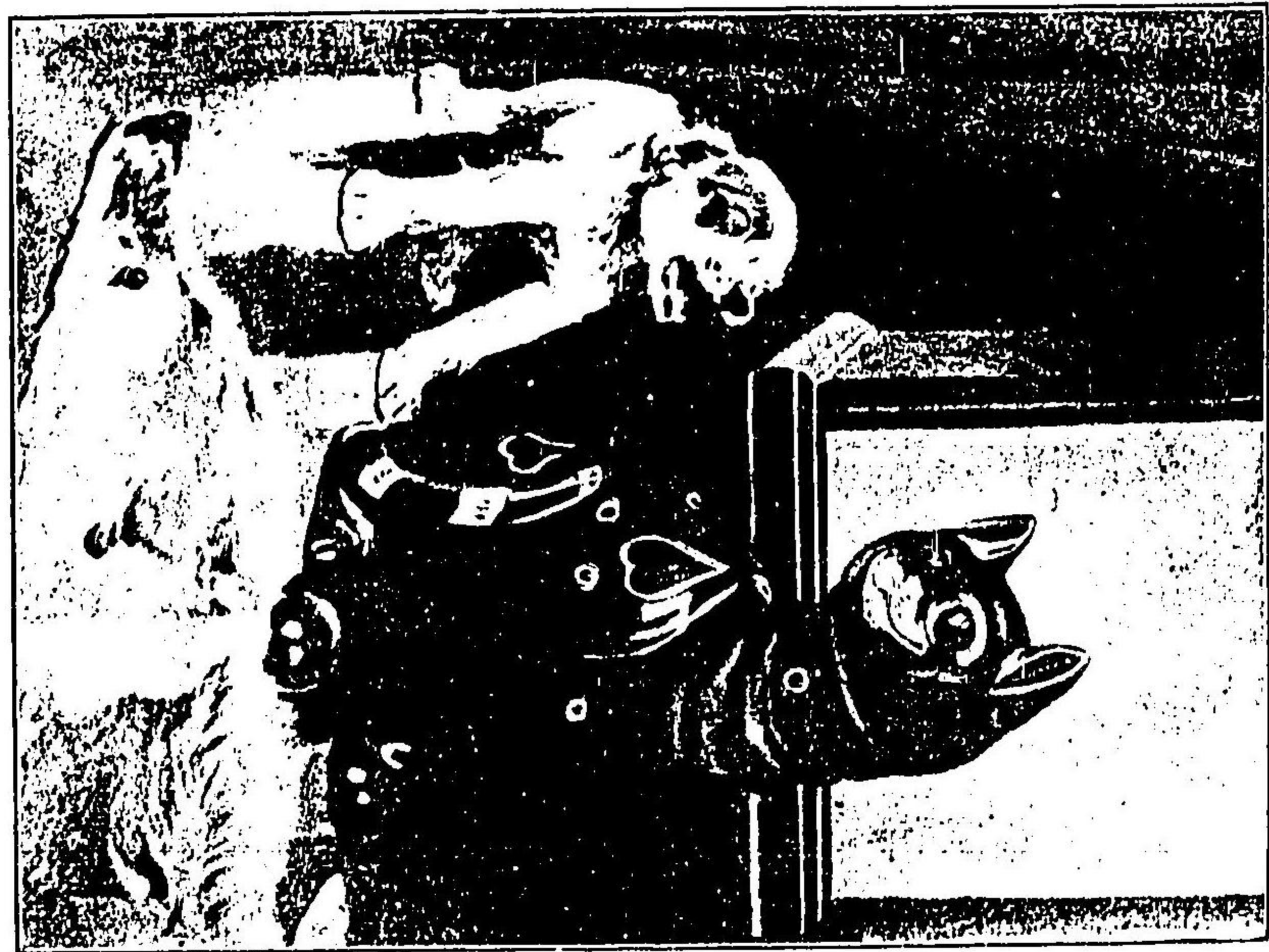
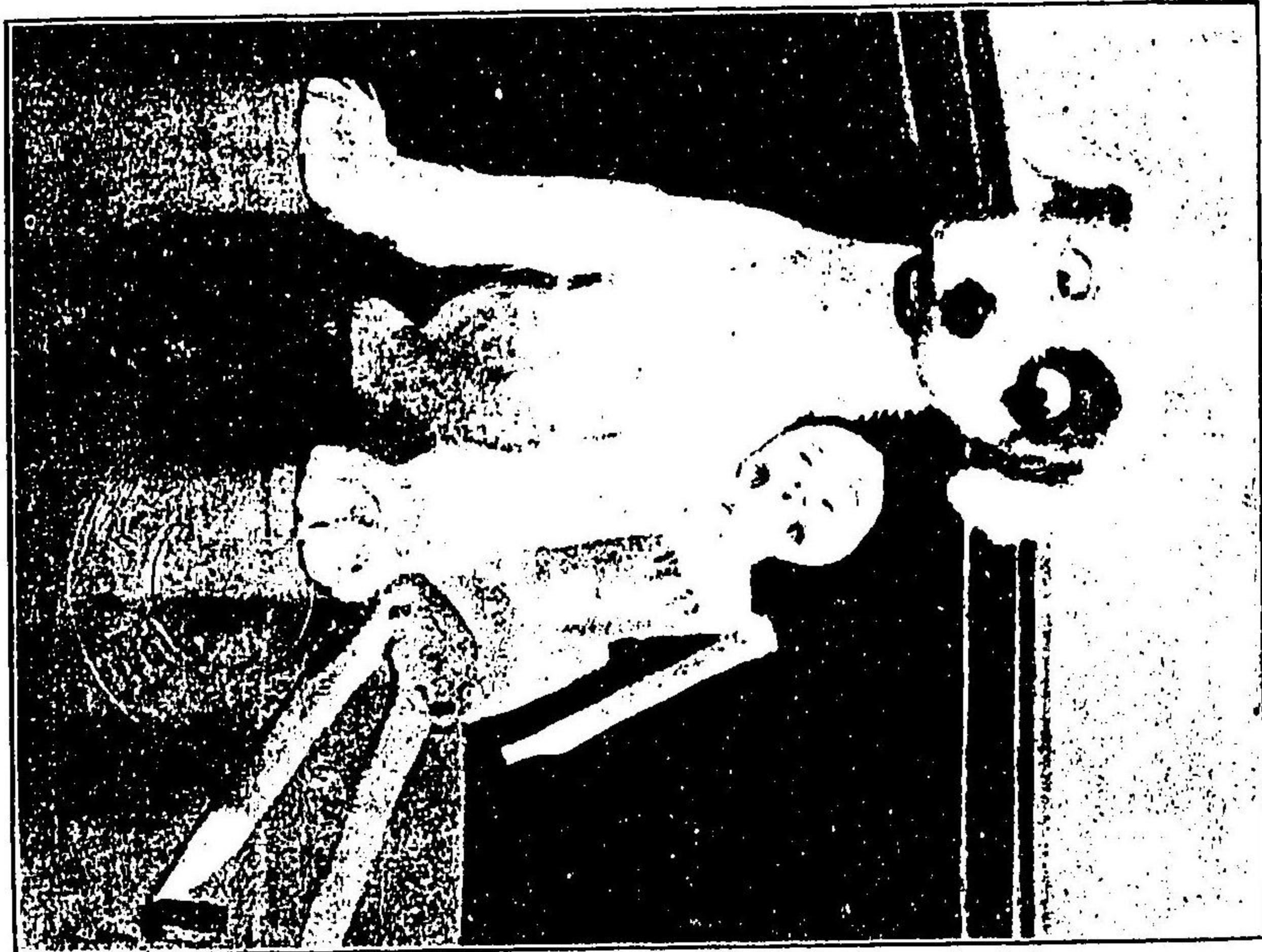
滑稽百笑話

東京

晴光館藏版







はしがき

笑！その門には福の來るといふ笑は人類にだけ特別に賦與された一種の靈能ではあるまいか。哺乳動物の高
等な者には、眼窩の中に涙管があつて、ある劇烈な感觸を
受けたときには、随分泣くことが出来るが、犬猫のやうな
者でも、笑ふことは絶えて無い。これは顔面に於ける筋肉
伸縮の工合が不十分である爲めであるかも知れないが、
全體動物は笑ふといふことを解し得ないものと見える。
勿論人類の笑にも、いくらも種類があつて、中には随分見
悪い作り笑——たとへば曾子が脅肩譎笑、病于夏畦といつ
た様な——もあるが、眞正の笑といふものは、たしかに美

二
的情操の煥發された作用であつて、本はといへば矛盾の直覺といふことから起つたものと考へられる。この外笑に關する生理的原理や哲學的解釋は、随分やかましいものであるだらうが、こゝには細述する必要もなからう。何は兎もあれ笑といふものには絶大な價值があつて、これを解せぬ個人若しくは人種は、尙ほ劣等な階級にあるものと謂はねばならぬ。世には洒落——今の洒落といふのは、秀句とまでは行かぬほんの地口であつて、内容に乏しく、甚だ賤しむべきものであるが——をも解し得ず、説明を聞いた後初めて夢の醒めたやうに、そりかと思ひ、今更めかしく罪もない膝を敲くものもあるが、吾輩は之を見る

ごとくに、憐憫の情に堪へぬのである。その上、美學上、喜劇を以て非劇の上に置くのは、いくらも理窟があるにしろ、上に述べた事が、その中の最も有力な者であらねばならぬと、僕は獨りて考へて居ます。喜劇は取りも直さず、笑を極致としたところの文學的作品でありますが、こゝに之と略ほ種類を同りして、はるかに原始的である者がありま

三
す。それは即ち笑話——俗に謂ふ落し話若しくは一口噺——笑話は、俗諺や俚諺など、同じく極めて卑近で、且つ普遍的であつて、誰とも分らぬ人によつて作られたのであります。僕は、かつて、俗諺の發展を論じて、下の如きことを述べましたが、これは笑話に移して宛てはめても、差支が

無からうと思ひます。

「これ猶ほ花にすむ鶯の琅々として轉づるに似たり。その何の時何の人が歌ひ初めけむことの今更知られ難きはかの鶯が何れの春より鳴き初めしか知られざるが如く、誰と定めて歌ひ初めしものなく、しかも誰しも之を歌ひ何處と定めて歌ひ初めし處はなく、しかも何處にも行はるゝは、俗謡の特性にして、傳誦の際、百萬の口耳に出入し、知らず識らずの間に推敲し、鍛錬せらるゝが故に、同一の俗謡も、國俗方言の殊なるに従ひ、自ら面目を異にするは、なほ衆鶯の其音を一にせざる妙趣ありといふべからむか……」

これを一般にいへば、鶯がいくら愛らしき聲で鳴くにしても、迦陵頻伽——佛說正法念經に見えたる——に比較することが出來ないと同じく、笑話・俗謡・俚諺などは、とても純粹な詩歌・戯曲などと其席を争ふことは出來ないけれども、前に述べた如く、その發展の工合が頗る國民的であるところから考へると、たとひ、半は無意味に見える笑話といへども、全然價値がないと云ふことの出來ないばかりでなく、吾輩は同胞の世襲財産の一として、之を子孫に傳へ、且つ能ふべくば、之が改良を圖ることが、頗る至當であると思はる。

顧みれば、吾等の極めて遠い祖先は、随分笑ひ好きな人

種であつたと見える。古事記を見ると、天鈿女命が天の岩戸の前で舞をしたとき、高天原をゆすりて、八百萬の神ともにも笑ひきと書いてあるが、その後、に佛教の影響を受けてからといふものは、丸るて幽鬱悲哀になつて終まつた。王朝時代の文學は、盡く涙の痕ににじんで居る。その間に存する笑話などは、今さら尋ねることが出来ない。そこで吾輩の謂ゆる笑話の一番古いのは、安樂庵策傳の書き残した醒睡笑といふ書物である。この策傳といふは、足利氏の末から戰國を経て、徳川氏の盛時、貞享、元祿の頃まで生き残つて居た人で、京都誓願寺の塔中、竹林院の坊主であつた。おもふに此人は曾呂利新左衛門などと同じく謂は

ば滑稽の雄であつて、爺婆猿蟹などの可笑しき童話から一轉して、短い笑話を案じ出し、諸侯の邸に出入して、大に持囃やされたものと見える。今傳ふところの醒睡笑には、板倉重宗の奥書があつて、元和元年の頃、安樂庵新太所望いたし、承り候へば、別しておもしろく存するに付てといふことが書いてあるのを見ても、それと推察することが出来。この頃は、茶坊主、醫者、按摩などいふ種類のものに、こんな風な男がいくらもあつたらうと思はれるが、やがて寄席が始まり、落語家といふ者が出来てから後、引き續いて明治の今日にいたるまで、笑話の製作及び普及に就いて、頗る目ざましい者があつたに違ひない。これ等の

笑話を集めたものは、醒睡笑の外に、いくらもあつて、博文館発行の滑稽名作集にも入れてあつたと思ふ。しかし漢學者の手に因て作られたものも少からずあるやうだ。僕の見たのは、笑話出思録、譯準笑話の二書であつて、前者は百後者は二百ほどを書き載せて居る。この外に、開口新語、笑堂福聚といふ者などが在る。そらだか、不幸にして手に入らない。そしてこれ等の書物は、今日甚だ稀れてある。爲に、折角の笑話も或は湮滅に歸しはしないかといふ心配もあるからして、今上記の二書に就いて、その最も傳ふべきものを今日の言文一致體に書き改め、時には多少の潤色を加へ、改刪を施し、又成らうことなら百といふ數にし

たいといふところから、支那の書籍、笑府、笑林、廣記の二書から數條を抜き、その外、自作をも二三加へたこれが即ち、この滑稽百笑話である。

僕は此書を著作する間に、料らずも笑話に關する二三の根本的原則を發見した。それは外でもないが、笑話は機智ある一種の才人の想像によつて案出される外に、次の如き場合から出来るものが少くないと思はれる。

(一) 實事より出たもの、新聞の雜報中にも小説の分子があると同じく、吾等の日常經驗する社會事象の中に、或る時ゆくりなくも笑話的好材料に出合ふことがある。これを特別に取り出で、一條の話柄として漸々に世に傳

はることゝが無いとも限らない。この書に就いて言つても、
符第九十九は、大久保彦左衛門の逸話だといつて、講釋師が
屢張り扇を叩いて語り出すのを聞いたことがある。また
壁に耳第六十四は、むかし奇行を以て世に知られた岡山の
藩老何某の事だといふ傳説もある。なほ他に無いものを
産み出す(第二十八)は、牧棲碧の事であつたといふ事を或る
本で見たこともある。

(二)他から轉化したもの。小説戯曲などの中に、作者の
構思に成つた笑話もしくは笑話の分子がある。これを抜き
き出で、多少の結構をこしらへて、一條の笑話に敲き上げ
るのである。例をいへば、この書に見えた養老湯(第六十八)は

狂言の「附子」から轉化したこと、疑ふべからずであつて、唯
だ彼れは黒砂糖とあるのを、此には玉子酒に改めたばかり
である。又旅人と馬方(第三十四)は、譯準笑話に出て居るの
であるが、これは十返舎一九の「膝栗毛」から抜いて來たも
のに違ない。こんな風であるから、詩人の警句で多少の可
笑味を含んだものは、少しく細工すれば、直に笑話になる。
最も近い話だが、小杉天外の書いたつとめ人といふ小説
の中に「媒なごは女の部類ぢや無い、脚爐の部類だ。床を暖
める道具なんだ」といふ様な句があつたと思ふが、これは
もとより、非道德的でありますが、その奇抜な處は、たしか
に笑話の好種子といはねばなりません。以上はいづ

れも膨大にされたものであるが、他に却て簡略にされて
笑話の體式を失ひ、一片の警句に還元(?)された者もある。
この書の雪(第六十三)の如きは、今になほ多くの落語家もし
くは講談師の口にするにはあるが、多くの場合に於て、
唯だ雪ですか、太分積りました、しかし幅は分りませんと
いはれる位のものである。こゝろいふ風であるから、中には
簡略にされた後、時間的關係の爲に風俗習慣の差違を來
し、全く可笑味を失ひ、やがて湮滅したのもあるだらう。
(三)復活 ある一つの笑話が、殆んど湮滅せむとして、わ
づかに世間に存在して居たのを、或人が取り出し、多少の
新趣向を加へて再び人口に膾炙せしめることがある。こ

の書の思ひつき第九は、寶曆五年(1755)出版に係る、笑話出
思錄に見えたるものであつて、その後四十七年を経て貞
享二年(1802)に十返舎一九の東海道膝栗毛が出たが、蒲原
驛の木賃宿に於ける六部の話は、全然これである。膝栗毛
の價値は輓近のアストン氏によりて、

It occupies a somewhat similar position in Japan to that of the

Picknick papers in this country, and is beyond question the

most humorous and entertaining book in the Japanese langu-

age.

といはれたのを見ても明であるが、物之本作者部類には
じめ一二篇は新案を旨とせしが、編を累ぬるまいに古き

酒落などをまじへ且つ相似たる事多けれども看客は其所らに意をとくめず只だ笑を催すを愛たしとて飽くことなかりしかばとあるのを見ると少くとも或る時古き笑話の復活をやつて幾枚かを塗抹したことは事實である。

わが邦に於ける笑話の發展及び分科は大方上に盡くした積であるがこゝに笑話の研究といふことに就いて一言述べて置かう。笑話は前にも言つた通り國民的産物であるからこれを時間的に言つても空間的に言つても人情の變遷趣味の高下に就いてその差異が幾微の間に分るものと斷定しなければならぬ。醒睡笑の初に

心うきたる侍のひくはんには五十にあまるものあり名を彌十郎とぞいひける。有時主たる人かの彌十郎をよび出しそちは年よりもあまりに名がわかひほどにけふからは右馬丞になれやとありしとき、ふみをふくみいひくとわらいければ、きやつを右馬丞とつけたれば、いさみていなゝいたよ。

といへる如き、右馬丞といふ名が吾輩の耳に近くあつたら、一層面白く感ぜられるだらう。これは取りも直さず古今時異にして、名字の變遷ありし爲に、可笑味の幾分を減殺したものである。また笑林廣記に、

雪川莫氏遊月湖至一酒樓飲見壁上有題字云春王正月

滑稽百笑話 目次

第 一	野中の邂逅	一
第 二	碁	四
第 三	書物の真違	五
第 四	名灸	七
第 五	酒の世界	八
第 六	謠	一〇
第 七	物の優劣	一一
第 八	蠟燭	一二
第 九	思ひつき	一四

第十	似而非風流	一五
第十一	大佛	一八
第十二	醫者	二〇
第十三	二百文	二一
第十四	梅雨	二三
第十五	薬の効験	二五
第十六	水仙	二五
第十七	大盥	二六
第十八	飛んだ真似	二七
第十九	逆夢	二八
第二十	無い者を産み出す	三〇

第二十一	酒代	三一
第二十二	氣轉	三二
第二十三	五十歩百歩	三五
第二十四	神前の供物	三六
第二十五	髭剃の注文	三七
第二十六	業腹な天氣	三七
第二十七	唾	三八
第二十八	醫者の手	三九
第二十九	火事	四〇
第三十	勘當された息子	四〇
第三十一	不孝者	四二

第三十二	手本	四三
第三十三	糞と思へ	四五
第三十四	旅人と馬方	四六
第三十五	將棊	四九
第三十六	おそろしい睨視	五〇
第三十七	香奠の金	五一
第三十八	猿面	五三
第三十九	煙草	五四
第四十	お悔み	五五
第四十一	惜しい命	五六
第四十二	吝嗇爺(其一)	五七

第四十三	吝嗇爺(其二)	五八
第四十四	轎夫	六〇
第四十五	馬の畫	六一
第四十六	盜賊	六一
第四十七	藪醫者	六三
第四十八	鯨の畫	六三
第四十九	無宿の星	六四
第五十	梟目	六五
第五十一	汗	六六
第五十二	唐崎の夜雨	六七
第五十三	破土瓶	六八

第五十四	鼠	六九
第五十五	赤壁賦	七〇
第五十六	晝睡と周公	七一
第五十七	吉良義英の二百年忌	七二
第五十八	犬の歳	七三
第五十九	謠の感應	七三
第六十	養老湯	七五
第六十一	ためし斬	七六
第六十二	灸の皮切	七七
第六十三	雪	七八
第六十四	壁に耳	七九

第六十五	贗物の蜈蚣	八〇
第六十六	暗がりの行燈	八二
第六十七	付木	八二
第六十八	あはて者	八三
第六十九	禁酒	八四
第七十	危ない石	八五
第七十一	盜賊か俳諧師か	八六
第七十二	米の價	八七
第七十三	珊瑚の緒じめ	八九
第七十四	夢中の酒	九〇
第七十五	如是畜生發菩提心	九〇

第七十六	學問の用	九二
第七十七	笑ひ事ぢや無い	九三
第七十八	二疋の犬	九五
第七十九	靴の價	九五
第八十	祝の贈物	九七
第八十一	小川の水	九八
第八十二	鼠の眞似	九九
第八十三	減らず口	一〇〇
第八十四	媒人の上手	一〇一
第八十五	牆の價	一〇三
第八十六	馬の稽古	一〇五

第八十七	屁	一〇五
第八十八	馬鹿律義	一〇六
第八十九	盲者の提燈	一〇七
第九十	すゝ掃	一〇八
第九十一	京都と伊勢	一〇九
第九十二	字を知らぬ同士	一一〇
第九十三	ねむり薬	一一二
第九十四	夫婦喧嘩	一一三
第九十五	夫婦喧嘩と盜賊	一一四
第九十六	備前の土	一一六
第九十七	女大學	一一八

第九十八 拾ひ物……………一一九

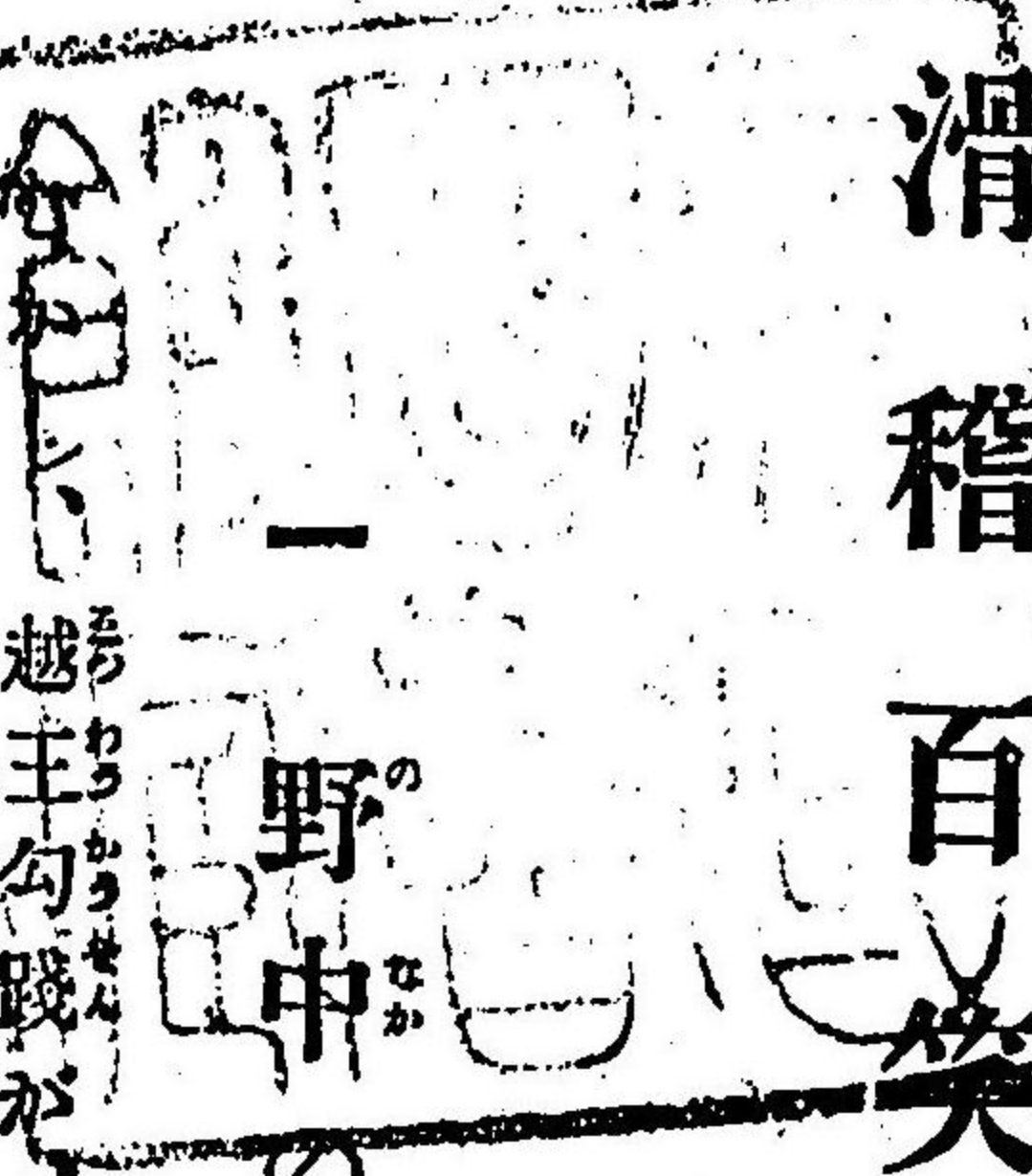
第九十九 筭……………一二〇

第一百 この兒はたゞか……………一二二

滑稽百笑話 目次終

滑稽百笑話

文學士 久保天隨著



野中の邂逅

進發しんぱつされたとき、一人ひとりの百姓ひやくしやうが、吳國ここくを伐つたうとして、數萬すうまんの兵士へいしを率ひきゐて
 踐申せんまをさるゝには『この一樽ひとたるの酒さけは、自分おんばかりで飲のむのも惜おしいもの
 だが、さりとして、數萬すうまんの兵士へいしに頒わたつといふことも出で來きない。よし
 く、思おもひ付ついたことがある』とて、人ひとをして河上かみかみに行いつて、其その
 樽たるの酒さけを流ながしに打うち明あけさせ、さて兵士へいしに向むかひ、『河かに下くだりて、酒さけを

飲み』と言はれた。そこで、兵士は、ばらばらと算を亂して、流に
臨み、手に掬つて飲んだが、酒の味はちつともしない、しかし勾踐
がひとりで食ふことを成さらないといふことが、知れたものだから
此君の爲には、命も惜しくないといふので、軍氣一しほに増て、と
う／＼吳國を打ち破つたといふことである。これと相似て、面白い
話は、下の如くである、ひとりの瀬戸物屋が、夏の暑き日、自分で
重荷をかつぎながら人影絶えた廣野にさしかゝるといふと、料らず
も、一人の侍に出合つたそこで能く／＼見ると、むかし馴染の友だ
ちであつたから、『これは珍らしい』といふので、石に腰を打ちかけ、
一別以後の事どもを細々と互に話し合つた。もう善い加減、話しも
済んだ頃に、瀬戸物屋は、どんぶり鉢の大きいのを一つ取り出して、

えいと聲をかける間もあらばこそ、物の見事、石に投げつけて、粉
微塵に打ち砕いて仕舞つた。友だちの侍は、大に驚いて、『貴様は發
狂でもしたのか、飛んでも無い詰らぬ真似をするぢやないか』とい
ふと、瀬戸物屋は之に答へて、『詰らぬ事といはれちや、情ない。實
は久々だから、一杯飲まうと思つたけれど、こゝらあたり酒屋は
なし、その上、御互に道を急ぐ折であるから、仕方がない。今どん
ぶり鉢を打ち砕いたのは、取りも直さず、酒の勘定を拂つた心持を
あらはしたのである』といつた。すると、侍は成程といひもあへず、
刀をすりと引き抜き、譯も分らず、踊り廻はつたものだから、今
度は瀬戸物屋の方から、『何をするのか』といふと、『これは貴様の振
舞酒に酔つて踊る心持を見せたものである』とこたへ、やがて二人

は、さらばくと云つて、袂を東西に分ちました。

四

二 碁

ある田舎の豪家で、どんな物でも持つて居ない物はない位、碁盤碁石も至極立派なのがあつて、床の間に飾つてあるが、御主人は碁の打ち方を知らない。ところが、ある日の事、御奉行様が、巡見の序に立寄られ、碁盤にきつと目をつけ、『どうだ主人、碁でも一つ打ちるか』と言はれたものだから、主人も否とはいはず、へいと答へて、やがて碁盤を持ち出したところが、この御奉行様も、碁の打ち方をちつとも御存じないので、どうして宜いか、ちつとも分らない。そこで、『苦しいないく、貴様から初めろ』といふと、主人は身を平

蜘蛛の如くして『どうぞ貴方から』と、數回押問答をした後、『然らば拙者から初めやう』といつて、御奉行様は、碁盤の真中に黒の石を一つ置かれました。すると、主人は、『然らば、御免蒙つて』といふので、白い石を一つ其上に置いた。今度は御奉行様が、又一つ、黒い石、其次は、主人が又一つ白い石。すると、折角積んだのが崩れて終つた。そこで、主人は、一尺ばかり後に飛退いて、『まことに畏れ入りました、手前は負けましてござります。』

三 書物の真違

ある國學者の家の隣に、貧しげな小店がありました。その家の娘、年の若いのに似合はず、なか／＼伶俐である處から、大にその

五

國學者の爲に可愛がられ、つね、其家に入居して、教を受けて居ました。ある日、娘は其母に向つて、『先生の御家には、御本が澤山あつて、私もその一つ二つを習ひ覺えましたが、伊勢物語や、大和物語などは、女たるものは是非讀むべきものでありますから、どうぞ買つて下さい』と申し出た。すると、母は『本を買つて、學問をするなどいふのは、お金の澤山ある人のすること、氣の毒だが、御前は今の處では、廢した方がよかるう』といつたが、親父は『なに、折角言ふのだから、買つてやりなさい。これが男であらば、遊歴だ何だといつて、旅籠飯、二十日も、三十日も、食ひながら、随分金もかゝつて、とても本の代ぐらゐでない』といつた。皆さんは、御存じでもありませんが、伊勢大和、二つの物語、いづれも歌の話を載せたものでありますが、この親父どの、自分に學問のない悲しさには、名の示す通り、名所圖繪、もしくは地理書の類と考へたのであります。

四名灸

風邪の薬には葛根湯をあてがふばかり、少し六つかしい病人に遇ふと、これは手おくれで、今更致し方もござらぬと、誤魔化す外には、何にも知らぬ險呑千萬を敷とまも行きかねた筈醫者が、何か一工夫と頭をなやましたをぬ、ふ思ひついたことがあつた。そこで、どうするかといふと、夏の頃、人の入り込む海水浴、もしくは水泳場に、大々的廣告をして『おのれ、近ごろ不思議な名灸を

八
發明したが、一度すゑさへすれば、生涯いかなる水に這入つても、溺死することはない』と吹き立てた。それから、二三日たつてから、何でも物は試といふので、物ずきの輩五六人、押しかけて行つて、取り敢へず、灸點を乞ふと、醫者澄んで、膝こぶしの上三寸ばかりの處に、灸點し、さて『御心得の爲めに御話し申すことがござる』といふのを聞くといふと、『若し水に這入られたならば、この所を越えたときには、決して深入をされては成りませむ。そうすれば、一生水難は夢にも無いものでござる。御疑は御無用。へへへ』

五 酒の世界

今なら郡長、むかしは代官と申された御役人が、はじめて其職に

就いて、その領内を巡回された。その路すがら、ある山里の小村にさしかゝると、向ふから、ひとりの老人、いたく酒に酔ひ、衣物の襟も合はず、胸毛を風に吹かせながら、千鳥足で横すぢかひに、鼻歌うたひながら、のこ／＼と歩いて來たが、制すれども聞かばこそ大道の真中に仁王立したまゝで、動かない。そこで、止むを得ず、引き立て、來て、よく／＼聞き正して見ると、誰あらう、村長といはるゝ男であつた。『されば幸の事、序ながら問ふが、この村の戸數はどの位だか』と、郡長が懇にたづねられると、『戸數は百、人は男女を合はせて六十人ばかりもござりましたよ』と答へた。そこで郡長は家が多くて、人があまり少いのを訝かしく思はれて、『再び何故か』と問はれると、村長はぬからず、『人は外にいくらもありま

すけれども、酒を飲むことを知らぬ奴等は、數へるにも及びますま
『S』×たき

六 謠

ある金持の家の祖父さんが、大變に孫を可愛がつて、いろくの
事を習はせた揚句、今日上流社會で流行るから、謠も一つ習へとい
ふので、日ごと怠らず勉強させました。然るところ、この祖父さん
は、自分で少しもこの心得の無いくせに、兎角いろくの事を言ひ
出し、あす何が何様もいけないの、聲が低くいなど、申されまし
た。そこで、孫は「祖父さまは、何も御存知ないくせに、何と申さ
れます。私が師匠から習つたのは、今やつた通りであります」と言

つた。すると、祖父さんは、「何を生意氣な、乃公を馬鹿にするにも
程がある」とわめき立て、顔を赤くして怒られた。そこで、孫は「そ
れでは、今歌つて見るから、何だか宛てゝ見なされ」といつて、鉢
の木ハチノキの終の文句、「いで其時の鉢の木は、梅松櫻にてありしよな」と、
歌ひ出すと、祖父さんは、「それは、知れたことさ、菅原だろう」

七 物の優劣

無風流の田舎者ども、ある振舞の廳に臨て、鰹腹さらひ込んだ後
鎧武者にはあらねど、屈伸さへ出来かねるまでに成つて、ごろく
寐そべつた儘、盡きせぬ興の名残を、雑談に更かしました。その時、
少しく聞いた風な若者が、「どうです、皆様、花と月と、世間ではな

らへて云ふが、どちらが優れた者と御思召す』と澄まして切り出すと、まだ誰も答をせぬ中に、俗物の標本は手前で御座いといふやうな顔をして居る親爺が、『それは知れたことさ、月の方がいくら善いか、第一路を歩くに提燈がいらぬ』といつた。そこで、又一人、『世間では物が懸け離れて、とても較べられないやうなことを譬へて、月と籠といふが、これはどつちが勝れて居るのだらう』といふと、前の親爺どのは、『又しても知れ切つた事を、それは籠が甘いサ。』

八 蠟 燭

意地きたなく、胴慾で、爪に火をとぼすのをさへ屁とも思はぬ親爺、夜、客の還るを送り出しても、火を持つても来ず、もし客が下

駄か知れませむといふと、それなら頭をそこらの壁にて、眼から火を出して探して御覽なさいと言ふ程な因業さ加減、まづ古今無類といはれたが、ある時、人の家に招かれて行くとき、小僧を呼びつけ、『夜、迎に来るときには、提燈に故意と蠟燭をささず、忘れて来た様なふりをするが可い。そうすれば、彼方の家で、きつと一本呉れるから、却て徳になる』と、懇々言ひふくめて置きました。さて時刻になり、小僧が迎に来て、『サア御暇しましょう』といふ段になると、どうしたものか、小僧はしくしくと泣き出して、起たうともしない。そこで、客齋爺『小僧早く提燈をつけろ』といふと、小僧はそつと傍にすり寄り、耳に口をつけて、蚊の様な聲で、『不調法をしましたが、とうぞ堪忍して下さい。言ひ付けられた事は、つ

い忘れて、蠟燭は家から持つて来ました。』

九 思ひつき

ある日、北風が勢すさまじく地面を吹きめくつて、路の塵は烟の如く飛び上りました。すると、何か一もうけ爲やうと、常々心を苦しめて居る男、『これは占めた』とゆふので、しこたま箱類を仕入れて、大通りに店を出しました。何故またそんな事を考へ出したかといふと、その理窟が面白いのであります。風が吹けば、おのづと砂ほこりが立つて、人の眼に這入り、眼玉の潰れるものも少くない。すると、この俄めくらは、外に仕方がないから、按摩にでも成らないかぎり、みんな三味線などの稽古を始めることに成る。そこで、

三味線屋が大に繁昌して、その胴を張る爲に、猫の皮の需用が多くなつて、野良猫はあるか、人の家に畜つてある、玉や斑までが、みんな打殺される。サーそうなると、鼠どもか勝手にあはれて、箱のたぐひ、みんな噛じりこわされて仕舞ふといふことであつたが、一ヶ月、二ヶ月、半年、一年とたつても、さばかりの利益もなかつた。或人が之を聞いて、『そう一風吹た爲に、箱屋がもうかる位なら、三日風が吹き續けは、都の人みんな盲にならなければならぬ勘定だ』

一〇 似而非風流

春の日の暮つがた、のどかに艶なる空のけしきに浮かされて、或人が片田舎の山里あたりを散歩して見ると、ふと一軒の家があつた。

木だち物ふりて、庭には大木の櫻が、やゝ盛り過ぎて、雪どまがふまで散りかゝる風情の、何とも譬へやうの無い程であつたものだから、見過しがたく覺えて、のこくと這入つて見ると、南むきの窓を明けて、そこに机を持ち出し、床の間あたりには、帙入り唐本なんどが、行儀よく積み上げられて居て、坐敷の真中には、茶釜が懸けてあつて、松風の音をして煮えたぎつて居る。そこで如何にも風流の住居。どんな人が住んで居るのかと、しばし見とれて居ると、それとは知らないものと見えて、一人の男が大欠伸して、手を延しながら、起き上り、あたりかまはぬ大聲で、『さてく金が欲しいなあ』と叫んだものだから、さすがに興がさめて、あはたどしく馳せ出して仕舞ひました。これに就いて、思ひ出したことがあるが、或

る歌の上手なお公家さまが、どんな歌の上の句にでも付け得るの句を考へたが、それは『といふ歌はむかしなりけり』としい。たとへば、『秋の田の、刈穂の穂の、とまをあらみ、は、むかしなりけり』、『春すぎて、夏來にけらし、白たふ歌は、むかしなりけり』の如く、やるべきであると思さると、瓢金な連歌師が、御側に居て我々ども、賤しいものんなことは思ひもよりませぬが、『それにつけても金の欲しいへば、これも亦た宜しかろうと思はれます。』花の色は、りな、いたづらに、それにつけても、金の欲しさ、秋の草木の、しほるれば、それにつけても、金、袖は、汐干に見えぬ、沖の石の、それにつ

『もししきや、古るとき軒端の、しのおにも、
しさと』などいふのは、如何のものでござりま
ました。

二 大 佛

或る人が、音に名高い奈良の大佛へ参詣して、その歸り
前の餅屋へ這入て、休みました。その家は、暖布に大佛
いてあるが、餅の形は、さほど大きくない。そこで、不
て、何故かと聞いて見ると、主人の答が面白い。『それは、
方達は、大佛様の素敵滅法、大きい處を御覽なされたから
ある物が、みんな小さく見えるのであつて、それは手前の餅

といふ譯でも御坐りますまい』と云つた。『なる程、聞いて見れば
それもそうか』と合點して、さて茶代を置いて、其店を出て、歩き
ますと、路に棄兒が一人、髪は延びて肩までふりかゝり、樹の下に
すやくと眠つて居ました。そこで、立ち止まつて、こんな愛らし
く、罪もない小供を、棄てるといふのは、どんな鬼心な親であらう、
あゝ情ないことだと、獨語をいひながら、抱き上げて、懷の中に捻
ぢ込み、さて、又ぞろ歩き出しました處が、だんく重くか
とてもく堪りません、そこで念の爲に取り出して、能くノ
て見ますと、これはそも如何に、畫にて見た卒塔婆小町もかく
かり、歳の頃は、七十にもなろうかと思はれる乞丐の尼であ
た。

一三 醫者

ある醫者の家へ、強盜が五六人、手に大だんびらを提げ、関の戸をわけながら押し込んだ處が、不思議にも、みんな身體がすくむて終まつて、不動の金縛りにてもかゝつた如く、身動もならず、互に顔を見合せながら、一物も取らず、這ひ出す様にして、やつこらさと逃げ出して仕舞ひました。醫者の家内どもは、その初、盜賊の這入つたことを聞いたとき、齒の根も合はず、ぶる／＼と慄へて居ましたが、これを見て、何やら譯は分らないが、先づは仕合せと、大層喜んで、胸をなて下し、やがて家の内をさがして見ると、主人の醫者殿は、藥の匕をよつ取つて、カんだ顔付凄まじく、藥局の真中に

に衝立つて居ました。そこで、何して御坐つたかと聞いて見ると、主人は莞爾もので、『熊坂長範ならばいざ知らず、高の知れた盗人ども、運能く命のまゝで逃げたが、若し押つよく此まで來ようものなら、一人も生かして還へず等ではなかつた』と叫びました。家内のものども、をかしく思つて、『盗人を殺すに刀もなく、短銃もなく、藥の匙などで、何なさる御積でしたか』と聞くと、主人は一層誇り顔に、『乃公はこの一本の匙で、何千人の命を取つたか分らない。それに、盗人の五人や六人、何んであらう、さて／＼幸な奴等どもだ』

一三二 百文

春の日影、ぼか／＼暖かく、吹く風も心地よく覺える時、

ました。折しも都ながら、場末の町の穢い處、路の傍に席を敷いて、いろ／＼の骨董品を押し列べて、店を出して居る老爺がおります。見渡したところで、破れた釜、折れた小刀、箆のはしくれ、さてはこわれた茶碗などの類ばかりで、これぞといふべき代物は一つもありません。そこへ、華族の御隠居でもあるか、打装の如何にも立派な御方が、一人の供を召し連れて、通りかゝり、態々足をとめられ、物數寄にも探がして見られると、何處の出來とも分らないが、兎に角、仔細ありげに燻ぶつた一つの花瓶が見つかりました。「これは飛んだ堀出し物、是非求めて遣はせ」と仰しやるものですから、御供の人が、老爺に向つて、「價は何程だ」と尋ねると、「へい／＼二百文で、一文も負かりません」と答へた。そこで、御供の人は、小聲で、

「殿様の御用になるのだから、もそつと高く價を言ふた方が、貴様の爲になるだろう」と注意しますと、老爺は、さも呑み込んだ顔付で、天にも響けと一層に聲を張り上げ、「二百文／＼、それで、一文も負かりません」

一四 梅 雨

四方の山々の俵さへ見え、雨は終日降り、降らずみ、何時晴れるとも知れず、蛙の聲ばかり田の面にかしましい梅雨の、十日あまりも打續いて、田舎は殊更に物さびしく、鬱陶きて、心を慰める物もありません。ところが、今、昏の頃、たゞならぬ物音が聞こえるといふので、

態々庭へ出て見ると、隣の親父が、屋根に押し
一上一下、虚虚實實、縦横無盡に帯を振り廻はし
る様は、キ印としか思はれません。そこで、訝かしさの
けて呼び留め、『何をしなさる』と聞いて見ますと、『あんまり天
氣が悪くて仕方がないから、こんな工合にして、雨雲を拂ひ散らせ
うと思ふのだ』と答へました。すると、老爺はしばらく考へて、『そ
れは駄目だ、寧ろその事、明日二人で山に上り、そこで雲を拂ひ散ら
そう』といひました。すると、此話を傳へ聞いた人が『二人ともま
だく行けない、乃公ならば、大きな油紙をこしらへて、周囲の山
の頂に張り渡し、一滴も雨の落ちぬ様にするサ。』

一五 薬の効験

ある人が、蓼を食ふと馬鹿が利口にな
馬鹿になるといふことを聞いて、嘘か真
て見ようといふので、先づ蓼を十日食ひ、次に茗荷を十日食つた
少しも効験が無かつた様に思はれる。そこで此事を友人に話して
『どうも、世の中で言ひ觸らすことは、あてにならない
友人は笑ひながら、『君が今更そんな事をいふのは、
利き目ぢやないか。』

一六 水 仙

伊豆あたりの暖い海國と見えますが、水仙の
ら、或人が遠くの山國に旅しようとした時、わざ
行きました。そこで、自慢らしく出して見せて、『一
何時ごろ、此花が咲くのか』といふと、無風流で且つ頓痴癡の田
者は『わしの處の葱は、そんな花は咲かないで、もつと太く、この
近處ての名物として賞められて居ます』

一七 大 鹽

ある貧乏な御公家様が、つくづくと嘆息して、『金持といはれる程
の者の處には、大判小判があまるほどあるだろうが、じやかうへと
ばかり欲しいものだ』と申されました。そこで、腰元の女 『何か

急に御入用の事でも、御有りなされますか』といふと、『ソイヤ大
鹽を五つ六つ欲しいものだ』と申されました。そこで又、『
れますか』と聞くと、『みんな雨漏のするところに置くのだ』

一八 飛んだ眞似

ある人に二人の息子があつたが、『子は三界の首枷といふ譬にもれず、
その爲に心遣をしないことは無い』とて、いたく愁嘆されました。
そこで、『何な事をされます、放蕩でもして、家を明け、七日も、十
日も、還らないといふやうな事ですか』といふと、『イヤ〜一人は
御公家の眞似を遣らかし、まつた一人は侍の眞似をして、とて始
末におへぬ始末で御座ると答へた。』それは又何故、それでは一人の

御方は、敷島の道とやらに御心を寄せられて、三十一文字とやらいふ、秋の田のといふ様なことをなされ、又外の御一人は、真蔭流の剣術、寶藏流の槍法など云ふ様な事でも、成されるのですか」といふと『それなら、まだしも所が、咎むるにも及びませんが、公家の真似する奴の方は、家の物何でも手當り次第擔ぎ出して質に入れ、侍の真似する奴の方は、他人様から、物を借りたら、決して還さず、強請も仕兼ねまじき様子で、三代つゝいた身代も、つぶれかゝつて仕舞ました。』

一九 逆 夢

ある貧乏人が、非常な高利な金を借りたところが、利に利を加へ

て、還へすことが出来ず、その中に、一年の大厄日たる大晦日になりました。その日、貸主の男が、すさまじき勢で、手荷鞆を提げて乗り込むと、こはそも如何に、主の男は坐敷の真中に、つくねんと坐つて、めそくと泣いて居ました。何の事やら、さつぱり譯が合らぬものだから、勢もぬけたものと見え、金貸の男、やさしい猫撫聲で、『縁起でもない、何を泣くのか』といひますと、『昨夜の夢を見たからで』と答へました。『ウン、そうか、然かし夢いふから、大方長生をするであらう』といつて慰めました。主の男は、『もう一つ夢を見ました。それは、今まで貴方を、残らず差上げたのでありましたが、どうどす、逆夢には其金を、たつた今、貴方から此方へ貰ふやうなことも

ござりませしようか。』

二〇 無いものを産み出す

御産は女の一大事、片足を棺桶へ踏み込んだも同然だと申しませす。ある學者の家の細君が、産の氣がついて、真夜中の頃、しきりに苦しみ出し、迎にやつた産婆もまだ來ず、お袋さま、たつた一人、うろくとして居られるけれど、肝心の御亭主は、書齋に引き籠つたまゝ、何とも言はない。餘りの事に、お袋様、大きに腹を立て、『産婦は腹も裂けるといつて、息も絶えくになつて居るのに、貴様はマゝ何の事だ、拘はぬにも程がある、さりとて餘りに人情が無さ過ぎるじや無いか』といつて怒鳴りますと、學者先生、澄ましたもの

で、『腹にあるものは、いづれ生まれます、それよりも、私は明日詩會があつて、課題を一つやつて居るところですが、さても無いものは、産み出されず、腹の皮千枚も破るやうな苦をして居ます。』

二一 酒代

ある貧乏人が、酒が大好きで、飲まねば仕事も出來かねるといふ位であるが、近頃少しも錢がもうからぬところから、一滴も口に入らず、しほれかへつて居ました。あまりの事に、其妻は見かねて、ふさくとした自分の髪の毛を切つて、かもし屋に賣り、いくらかの錢に代へ、酒の三四合を買つて來て、『せめてもの憂さ晴らし、明日からは精を出して下さい』と夫に勧めました。すると、夫はにこに

こ物で、嘗める様に珍重して飲んで居ましたが、やがて買ひ調へた譯を聞き、『ほんに女房は持つべきもの、ア、有り難い』と如何にも、感謝に堪へぬ様なけしきでありました。そこで、妻は今まで冠つて居た手拭をとり外して、髪を切つた跡を見せるといふと、御亭主は、猶ほ更ほくそ笑をして、『扱ては丸坊主に成つたといふてもなく、まだ確かに、今一度飲めるだけのものはあるな、コリヤ、又有り難い』。

二三 氣 轉

ある侍が、非常のやかまし家であるところから、下部か居つかす、たび／＼代つた揚句に、善いのに取り當つたとて、大層に喜び、或

る日面と向つて、『もと居つた奴は、懶惰者で、その上氣が利がず、まことに世話がやけて仕方がなかつたが、貴様は、實に感心な奴だ。毎日早く起きて、上下の掃除をし、淨手鉢、煙草盆の灰吹まで、残らず奇麗にし、一日も怠らず、晝休もせず、居眠もせず、萬事に付けて捷くて、別に差圖も入らず、獨身ずまひの此方には、誠に持つて来いといふ奴、牛を馬に乗りかへたといふのは、この事だろう。』と、大層に賞めそやしたのだから、下部も大に喜び、『これなら働さ甲斐もある』といふどころから、いよく精を出し、一言いへば直に『へいと答へ、まことに響の聲に應ずるが如く、日に何度となく、表へ出ても、さながら飛んで行くかと疑はれるばかり、實に譬へやうのない程でありました。すると、或日のこと、主人は風邪を引い

た氣味で、朝少し遅く起きて見ると、下部の影が見えませむが、しばらくすると、外から歸つて來ました。主人は、今日は珍らしく不機嫌で、『貴様が平常したことは、偽だろう。何だつて、又、乃公の氣分の悪るいどきに限り、黙つて外に出るのか、不埒千萬、百日の説法、屁一つといふのは、此事だろう。イヤハヤ、見下げ果てた奴だ』と圍敷ながら、言ひますと、下部は畏まつて、『どうしまして、御氣分が悪い御様子ですから、御醫者を呼びに行つたのであります』と申しますと、主人の機嫌、がらりと直り、いよ／＼信用して居ました。すると、それから二三日たつて、或る夜、主人が非常の大熱で、呻き苦んで居ましたが、その次の朝、下部は又ぞろ、そつと出て行き、長くかゝつて、やつと還つて來ました。主人は、大に怒つ

て、何處へ行つたかと責めますと、下部は、『昨夜から大分、御危篤の御様子と見受けましたから、御寺へ行つて、坊さんに來る様に申し付けて來ました。』

〇三三 五十歩 百歩

これは穢ない御話だが、實際あつたことだと聞きましたから、御免を蒙ります。ある家で、山出しの下部を一人召し抱へたところが、萬事につけて、ぞんざいて仕方がない、第一便所に行つても、手を洗つたことがありませんと、下婢の告げ口、聞き捨ならず、主人が散々に叱りますと、口の中で、ぶつく／＼言ひながら、尻も拭かないのに、手を洗ふ筈がないと力んで、聞きませんから、とう／＼暇を

遣つて仕舞ひました。すると、其次に抱へた下部は、便所から出る度ごとに、ぎしくと手を洗ひます、これは又珍らしい奇麗ずきの奴だと、ひそかに感心して居ますと、或時手を洗はすに、行つて仕舞ひました。そこで、呼びどめて、何故かと聞いて見ると、『今日は珍らしく紙で拭きましたから、別に手を浄めるにも及びますまい』

二四 神前の供物

信心をするものは、神様の前に御膳を備へることがあります。見た様から賤しい下女が、湯島の天神に来て、二百文を帯の間から出し、どうかこれで御膳をそなへて下さいと頼みましたから、神主は、『それなら、一分出さなければ可けない』といふと、『それぢや仕方が

ありませむ、氣は心、せめて御茶漬なりとも、そなへて下され』

二五 髭剃の注文

ある床屋の前に、大きな看板をかけて、御望次第と筆太にしるしました。すると、一人の客が来て、『望があるが、どうか、遣つて呉れるか』と申しますから、床屋の主人、『何でも仰せ次第』と答へますと、『どうか、一本置きに髭を剃つて呉れ』と言ひました。主人もさるもの、やがて剃刀を研き、掌にあて、試めしながら、『宜しうげす、サー一本置きに、御自分でしめして揉みなされ。』

二六 業腹な天氣

朝早く、殿様の御駕が、本陣を出立されやうとしたが、雲は空に満ちて、如何にも險呑な天気である。そこで、御立を待つて居るものどもは、みんな空を仰いで、早く晴れて呉れば可いと、祈つて居ました。すると、後の方に、溜息をするものがあつて、『役にも立たぬ、朝ぐもり、さて〜業腹な天気だナ〜』といつて居ます。するとある人、不思議に思つて、ふり向ひて見ますと、合羽を着た駕舁でありました。

二七 唾

草鞋とりの奴は、主人の後の方、二三尺も離れて従つて居ます。その男の丈高いのに比らべて見ますと、主人は半分くらゐしかあり

ません。すると、奴の吐きかけた痰唾が、主人の首のあたり、ぼんの窪に、べつたりひつかゝつたものですから、主人は眞赤になつて怒りました。すると、奴は平氣なもので、『實は貴方の頭の上を越させうと思つたのですが、つひ失誤りました。』

二八 醫者の手

玉敷の都大路の真中で、ある男が、醫者に衝き當りましたから、醫者は大層怒つて、榮螺の拳をかためて、頭の上を一つ御見舞申せうとしました。すると、其人は地面にいつくばつて、『どうぞ手でなぐることだけは廢めて、足で蹴つて下さい』と申し出ました。傍に見て居た人が、何故かといふと、『凡そこの醫者どの、手にかゝつ

て、生きた者はない。足で蹴られた方が、まだ可いのサ。』

二九 火事

北風すさまじく吹きめぐる冬の夜の、いたく更けたる時、けたま
ましい警鐘の響、『ヤー三つ番だ、なに芝だ、それなら親類の方
だ、貴様飛んで行つて来い、』といつて息子を起すといふと、おはて
、駆け出して、行きました、息が切れて堪らず、最早や駆けられ
ぬ様になりました。そこで嘆息していふには、『火事は近いのに限る
ナ』

三〇 勘當された息子

ある町家の傍に、火事があつたところが、勘當された野良息子が、
息を切つて駆け付け、かひなくしく手傳をして、ありとある道具類
を大方ひとり出して仕舞ひました。すると、親爺が見て、『貴様は
救も出なひのに、何故来たか』といひますと、『いくら勘當されたと
て、親の家の焼けるのを、外處で黙つて見て居ることは出来ません。
どうぞ、是までの事も、序に御救しなされて下さい』といひました。
そこで、親爺も感心して、『ウン折角の事だから、救してもやらう。
以後は堅く慎め』と言渡し、その儘なほも力を盡して、いろく持
ち搬ばせる内に、幸なるかな、風の向きもかはり、その上、消防夫
が盡力した結果、火事も消えて仕舞ひました。すると、息子はいそ
いで、箆笥の傍に寄り、引出を抜いて、衣物を着代へ、仙臺平か何

にかの袴を出して、見事仕度をして仕舞ひました。親爺は、何やら譯が分らぬから、何處へ行くのかと聞いて見るとこれから、『火元へ禮に行きます』

三 不孝者

ある處に、不孝者がありましたが、二十四孝の話を知り、孝行の徳は目に見えぬ鬼神までを感ぜしめたことを、非常に有り難く感心して、折も折は眞似をして見やうと思つて居ました。すると、母親が病氣になつて、なかく重くなりかゝりました。ある日、ことさらに色を和げ、聲をやさしくして、枕元に近いていふには、『阿母さん、は笥が御好だが、食べたくはありませんか』といひまし

た。が、母は何の氣も付かず、『この寒いのに、御前どこに笥があるものか』といひましたから、『そんなら、鯉はどうです』といふと、『池の水も堅く凍つて仕舞つたらうに、どうして鯉がとれるものか』と言ひます。『まれば、何なりと御好なものがあれば、仰つて御覽なさい、出来るだけは、調へます』といふから、母親は『何も別に欲しいと思ふものもないが、鰻鮓でも一杯食べて見ようか』といひます。息子は大に怒つて、『わからずやの糞婆め、そんな何でもないことは、二十四孝の中にも書いてないじゃないか。』

三 手本

田舎の貧乏人の子供が、御師匠さんの處へ行つて、毎日顔にまで

手習をして、眞黒になつて歸つて來ますが、ある日、清書をかへして貰つて來て、父親に見せますと、父親は元來無筆なのにも拘はらず、こゝの棒が少し短い、こゝの處があんまり上り過ぎたり、何のと、いろいろの事を申します。そこで、子供は、『それでも御師匠さんの下さつた御手本に、そうあるのだから仕方がない』といふと、『そんなら手本を見せろ』といひますから、手本を出して、父親に渡しますと、倒に見ながら、較べて居ます。『阿父さん、それは倒てはありませんか』といふと、『何を言ふのだ、氣の利かぬ奴め、これは貴様の方に見せてやろうと思つて、わざ／＼かうして居るのぢやないか、生意氣な事言はずと、能く聞け。』

三三 糞と思へ

腕や脊に入墨をした年若な無頼者が、或日酒に酔つたまぎれに、路の真中で侍に衝き當りましたが、鯨鋒張りて、斷りも言いませんから、侍もさるもの、大に腹を立て、『明き盲め、こわいといふ事を知らないか』と言ひながら、早や腰に差して居た人切り庖丁をひねくつて居ます。『何にをぬかす、三びん、乃公は侍なにか糞とも思はないぞ、何にがこわいものか』といひますから、侍は其男を引き捕へて、名主の處へ連れて行つて、悪口雑言、無禮の廉々を告げました。そこで名主は、其男に代り、『どうも酔ひつぶれて居るものですから、宜く御勘辨を願ひます』といつて、一先づ侍を還した後、『ヤ

イこの命知らずの馬鹿者奴、何だつて、又あんな無禮なことをしたのだへ。その上、糞とも思はないと言つたのはあんまりじやないか、よく／＼慎みなさい。これから後は、侍は糞だと思つて、決して觸つてはなりませんぞ。』

三四 旅人と馬方

馬方や車夫などは、いろ／＼と有りませぬことを喋舌り散らして、それとは無しに増錢を請求するのが、商買の奥の手であるそうな。むかし、或人が馬に乗つて旅をする時、馬方が、『もし旦那、世間には随分途方もない奇妙なこともありますよ。昨日乗せた旦那は、珍らしくえらい御方で、賃錢はもうきめたが、今から考へると、あま

り安すぎる。そこで、酒代を別にやらうが、こゝでも一つ飲めと仰やつて、途中で一休して、たらふく酒を振舞はしやつた。それから、又云はしやるには、コリヤ馬主、貴様一日馬を引きながら歩いて、さそ草臥れたらう。是から、乃公は下りて、其代りに貴様を乗せてやらうと仰やるが、コリヤ何たることだ、私乗ることは厭ひですと、いくら言つても聞きなさらない。そこで仕方がなく、馬に乗ると、旦那がわざ／＼、手綱を執つて、引いて行かしやる。それから、とう／＼宿まで行き着くと、貴様馬に乗つて、さぞ尻が痛くなつたらう、といふので、乗賃を下さつた。何と、えらい事ぢやありませんか』といふと、馬上の旅客は、知らぬふりして、空軒をかいて居ました。』そこで、旦那あぶない、お起きなさい、お起きなさい』と

「この命知らずの馬鹿者奴、何だつて、又あんな無禮なことをしたのだへ。その上、糞とも思はないと言つたのはあんまりじやないか、よく／＼慎みなさい。これから後は、侍は糞だと思つて、決して觸つてはなりませんぞ。」

三四 旅人と馬方

馬方や車夫などは、いろ／＼と有りもせぬことを喋舌り散らして、それとは無しに増錢を請求するのが、商買の奥の手であるそうなる。むかし、或人が馬に乗つて旅をする時、馬方が、「もし旦那、世間には随分途方もない奇妙なこともありますよ。昨日乗せた旦那は、珍らしくえらい御方で、賃錢はもうきめたが、今から考へると、あま

り安すぎる。そこで、酒代を別にやらうが、こゝでも一つ飲めと仰やつて、途中で一休して、たらふく酒を振舞はしやつた。それから、又云はしやるには、コリヤ馬主、貴様一日馬を引きながら歩いて、さぞ草臥れたらう。是から、乃公は下りて、其代りに貴様を乗せてやらうと仰やるが、コリヤ何たることだ、私乗ることは厭ひですと、いくら言つても聞きなさらぬ。そこで仕方がなく、馬に乗ると、旦那がわざ／＼、手綱を執つて、引いて行かしやる。それから、とう／＼宿まで行き着くと、貴様馬に乗つて、さぞ尻が痛くなつたらう、といふので、乗賃を下さつた。何と、えらい事ぢやありませんか』といふと、馬上の旅客は、知らぬ振りして、空軒をかいて居ました。』そこで、旦那あぶない、あ起きなさい、あ起きなさい』とい

ふと、旅人はやつと気が付いたといふ様な顔をして、目をこすりながら、「あんまり馬が遅くて、埒が明かぬものだから、つひ眠気がさして来た。昨日乗つた馬は、善い馬であつて、馬士も亦飛んだ氣の善い男であつてよ。その馬士のいふには、旦那はこんな早い馬に乗りなされて、今に落ちよふか、コリヤ滅多に眠つてはならぬなど、心遣して居なさるだらう。夫が氣の毒でならないから、モ一賃錢は貰いますまいと言つて、途中の宿へ來ると、旦那は馬の鞍で腰が痛みましよう。ちと下りて、御休なさい、もし酒でも召上るなら、酒手はこちらから上げましようといつて、さんく酒をすゝめ、それから約束したところまで來ると、先の宿まで送つて上げたいが、私の馬ははねますから、外の馬を取つて乗つて行かしやれ、駄賃は私

が上げましようといつたが、あんな氣の善い馬士も、無ひものだ』といふと、馬士は歩きながら、眠つたふりをした積りでもあるか、『ゴウくムニアく』といひ續けて居ました。』

三五 將 碁

田舎の紳士どもいはれる男が、都に出て來たところが、日ごと降りつく長雨に、何處へも出ることが出來ず、旅籠の二階に燻ぶつて居ましたが、洒落れた遊は知らず、本は讀めず、何とも退窟て仕方ありませんから、平生好きな將碁でも差して見やうといふので、主人に命じて、相手を招かせました。すると、紳士先生、ついで様に負けて、一遍も勝たないものだから、不平で堪まらず、相手の衆

が歸つた後、主人に向ひ、『今日來たのは、みんな名人といはれる人達だろう、明日は並々の者で宜しい』といひますと、『なにみんな差し習ひのものばかりで、あれより下手なものはありません』と答へた。すると、紳士先生、嘆息して、『さて、都は思ふに似ず、不自由な處だ』

三六 おそろしい睨視

ある人が睨視むことが上手で、如何にも凄く、且つ怪醜しく、一目見たものは、魂消るばかりで、逃げ出さずに居るものは無いくらいでありました。ことに、元は一廉の財産家でありましたが、今は非常に左り前になり、二進も三進も利かぬところから、この歳の暮

の關を何様して越そうかと思つて居た商家の主が、人の話で、この男の事を聞き付け、わざ／＼雇いに行つて、店先に座らして置きました。ところが、債取に来る者ども、いづれも喫驚して、そこ／＼に逃げて仕舞ひました。そこで主人は大に喜び、厚く禮をしました。が、今歳も今日だけといふ大晦日の日に、いくら迎に遣つても、参りません、そこで、主人が自分で行つて、是非とも来て呉れろと、たつて頼みましたところが、『イヤ、今日は何様しても不可ませむ、人事どころではなく、今から一日家へ来る奴輩を、睨視めて居なくてはなりません。』

三七 香奠の金

九尺二間の裏店に住んで居るものが、歳の暮の不景氣を何様することも出来ず。日ごとく、方々から催促されるのを、一一断つて居ることも出来ませんから、苦しまぎれに、苦肉の一計を考へ出して、頓死の真似をして、棺桶を一つ家の真中に据ゑて、自分は其中に息を殺して、窮屈を忍びながら、這入つて居ました。すると、一人の債主が來ましたが、内儀さんは空涙を流し、棺の前でワ〜と泣いて居ます。債主は、事の次第を聞き、『それは如何にも氣の毒な事だこの節季には一層御困りでしやう』といつて、いくらかの金を紙に包んで『これはほんの志ばかりの香奠で御座います』といつて差し出した。内儀さんは、心の中で、今までの負債を帳消にして貰つた上に、今いくらか貰ふといふのは、餘りの事だといふので、辭

退して還へしました。すると棺の中では、之を失うては大變だと思つて、散々氣を揉んでおせつた揚句、廢せば善いのに、棺桶の蓋を跳ね飛ばして、『折角の御志を何故無にするのだ、貰つて置け〜。』

三八 猿 面

太閤様もとうであつたといふが、ある財産家の主人、その顔が赤くて、どことなく猿に似て居るところから、それとなく、綽名が付いて居るのを、薄々聞いて知つたものと見え、人が何んでも無い話の序に、猿といふことを一言でもいふと、大に怒つて、其後はちつとも寄せつけません。しかるに、日頃此家に入出入する仕事師の親方が、何やら主人の氣にさわることをして、大層怒られ、以後出入は

差留めだといはれた者ですから、食ひはぐれては大變、御辭儀をする分には、いくつしたからとて、金もかゝらぬといふところから、額を疊にすりつけて、謝り、さて申しますには、『私が貴方の御家から見棄てられたならば、それはく、丸て木に離れた……』猿といふ字が、喉まで出かゝつたが、それを云ふと、猶更火の手を高めることゝ氣付いたが、さて一旦口に出したことは、駟馬も追ひ難く、今更取消の仕様もないものですから、思ひ切つて、『……猫イヤ木鼠の様なもので御座ります。』

三九 煙草

ある隠居の別宅に、一本の珍らしい草が生えました。その高數尺

に及び、葉は大きく、紫の花を咲きました。そこで、主人は來る人ごとに、吹聴して自慢します。まことは誰でも知て居ますが、機嫌を害ねることを恐れて、それと名を申すものもなく、主人はいよいよ得意でありました。その後、或人が『これは煙草であつて、別に珍らしいものでもありません』といひますと、主人は『誰かこゝへ吹殻を落じて、生えたのだろう。』



四〇 お悔み

ある人、友達の男が長々病氣の處、とうとう今朝死んだと云ふことを聞き、それでは悔みに行かうといつて、わざわざ出かけたところ、何だか様子がちと變であるから、念の爲め尋ねて見ると、『今

丁度大切といふところで、晩までは何様かといふ處です』と答へました。すると、『ハイそうですか、それは少し早や過ぎました。それでは、外を廻つて、後刻屹度上りませう。』

四一 惜しい命

ある田舎の婆さんが、毎朝杖をつきながら御寺に参詣し、本堂の金佛様に向つて、『私もモ一浮世の務の濟んだ軀で、何にも思ひ残すこともありませんから、一日も早く御引取下され』と申します。これを毎日聞き慣れた小僧は、耳にたこの出来た様な氣持がして、如何にもうるさくて堪らないといふところから、或る朝金佛の後に身をかくし、婆さんが例のをやらかすといふと、『善哉、如是畜生、

發菩提心、それ程に云ふなら、折角の壽命を縮め、今夜冥途へ行かれる様に取り計つてやるから、有り難く心得ろ』といひますと、婆さんは、喫驚りして、腰をぬかし、『マー、御待ち下さい、實の處は未だそんなに死にたくはありません。』ラツかりじやう談も言いな

四二 吝嗇爺 其一

ある金持の隠居が、頗る付の吝嗇であつて、自分の名も付いたものは、塵芥一本も人にやりません。庭の後は池があつて、春の未から夏にかけて、蛙が其中にあつまり、夜更けて月の暗い時分、鳴き立てる聲は、なか／＼やかましい程であります。

どころか、或る人が庭に池を堀り、どうか蛙を放して清い聲を聞きたいといふので、小僧を使として、隠居の處に貰にやりますと、隠居は例の通り、しかめ面をして、さもなく惜しそうに、家の者に向ひ、「一番小さい様なのを探がして、二つ三つやるサ。」

四三 吝 嗇 爺 其 二

おなじ様な吝嗇な金持の隠居、平生一文も無益には使はず、まこと守銭奴といふ稱號を受けるのに適當して居ましたが、定命は仕方がないもので、とう／＼病の爲に死んだ後かたの如く三途川を渡り、閻魔王宮に到着しました。すると閻魔王は、他の十王たちと相談をして、「今少し嚴重にしないといふと、罪人どもが何處かへ逃

げ隠れて可けない、全體吝嗇ともいはれる位な者は、なんでも、かんでも、自分の爲ばかりして、人の事は拘はないといふものだから、これぞといふ悪事はないにしても、世間に害をなすことは、夥いものである。だから、宜しく黒闇地獄に送つて遣るが宜いので、隠居の亡魂は、鬼どもに引き立てられて、のきましました。すると、びか／＼と一點の火の光が、暗の中にきらめいて見えます。閻魔王、「これは實に不思議だ、彼奴は吝嗇だといふけれど、斯の如く身體から光明を放つところを見ると、まんざらの者とも見えなない。何にか、陰徳を行つたことがあるのであらうか』と心の中に考へ付かれたものですから、傍に居た獄卒の鬼を呼んで、早く跡を追つて行つて調べて參れ』といはれました。しばらくする

と、鬼が歸て来て、『何に別に不思議もありません、あれは、爪に點ぼした火であります。』

四四 轎夫

むかし轎夫といふものは、今の車夫とは違つて、なか／＼威勢の善かつたところもあつた者だそうです。或る人が、轎に乗つて行きながら、轎夫が裸體の儘、犢鼻褌一つで、此風さむきこの冬の夜を、別に何とも思はない様子を感心して、大層ほめました。すると轎夫は、『なに何でもありません、身體中、顔だと思つてさへ居れば、嚴つい事は無いのさ』と答へました。そこで、今度は如何にもてつぷりと肥えたる、色は銅の如くだが、軀幹魁梧とでも形容したい程に見えるのを賞めますと、『なにさ、是だとして、半分以上は垢でサ。』

四五 馬の畫

ある家の子供が、畫が好きで、馬ばかり畫いて、夜遅くなつても、なか／＼眠りませんから、親父が叱つて、燈を消させます。子供は、『燈が無くては馬が畫けないと申します』と、親父は、聲を荒らげ、『暗がりでも、牛でも畫け。』

四六 盜賊

頬冠をした盜賊が、夜遅く何處かに善い場所ないかと思つて、家なみに覗き歩いた後、こゝこそといふので、一軒の家に這入つて

六十二
見ましたが、穢いこと限なく、其上價値のありそうな代物も見えず、押入など探がしましたが、無益だと鑑定が付きましたから、そのそと出て行きました。亭主はこの時眼を覺まし、「オオ親方、戸を閉てから、往んで呉れ」といひました。ところが、賊もさる者、「何に要心するにも當らないぢやないか、氣遣なしに寢され」と言ひ放つて、さつと出て行き、其隣の家に這入りましたが、同じく何にもなくて、唯だ坐敷の隅に大きな葛籠が一つあつて、一寸動かして見たところが、なかく重い様でしたから、此奴甘いものを見つけたといふので、取り敢へず、蓋を刎ねて見ると、中に真裸體の男が。一人、まだ目は明けぬが、眠い様な聲をして、「誰ぢや、悪い事をするな、蚊が這入つてならぬわい。』」

四七 敷 醫 者

敷と名の付く醫者が、藥を盛り違へて、或る家の一人息子を死なかししましたから、先方では裁判所に訴へやうとするのを、どうにか、こうにか、宥めて、自分の子を其家に遣つて、やつと無事に治まらがつきました。ところが、ある夜、遅く、戸を叩くものがあつて、『主婦が疾かに大病ですから、直に来て下さい』といひました。醫者は、其妻に向つて、『滅多に往かれぬ、悪くすると、其方を取られて終ふかも知れないからナ。』

四八 鯨 の 畫

ある人が屏風を新に張りかへ、わざわざ書工の處へ持つて行つて、『鯨を一つ書いて下さい』と頼みました。書工は、『マ、御待ちなさい、鯨は何十間とある大きな魚で、尋常の海には居ない位な者だから、『こんな小さい屏風には書き切れない』と申しますと、『イエ何に、たんとは要ません、たつた一切れて宜しう御坐る』

四九 無宿の星

今ではあまり言ひませんが、むかしは自分の國から逃げ出して来て、一定の宿所もなく、うろついて居るものゝことを、無宿といひました。ある人が、天文を教へるとして、二十八宿の圖を手にし、屋根の上に立つて、空を仰ぎながら、一一指し、あれは牽牛、あれは織女、あれは何、あれは何と、其名を數へました。すると、一點の流星か、頭の上から、長い光の尾を引いて、落ちましたから、『あれは何といふ星ですか』と聞きますと、『二十八宿の外のであるから、無宿ものさ。』

五〇 梟目

下婢が、在所からの手紙を受取りましたから、同じ家に住んで居る下部に、讀て下さいと頼んだところが、いろはも讀めぬ男だものだから、何にやら分らず、然しそれといふのも愧かしいものと見えて、『乃公は鳥目だから、見えな』といひました。下婢は、『それは變ぢやありませんか、鳥目といふのは、夜になると見えないので、

晝の中は差支もないといふことぢや有りませんか、』といひますと、
『ナニサ、公乃のは鼻目だから、晝も見えないのサ。』

五一 汗

ある隠居が、夕飯のとき、鱈腹飲んだり、食ひこんだりしたもので、
だから、たいさへ暑い夏の夜を、如何に蒸すやうでならぬといふの
で、大肌拔になり、椽側に腰を打かけ、小僧を呼び寄せて、團扇で
扇がせ、胸毛の戦ぐまで、強くやれと申し付けました。小僧はまだ
飯も食はず、ひだるくてならないが、主人の言ひ付けであるから、
仕方がなく、精一ばいの力を揮ひ、腕も抜けるばかりになりました。
かくて、凡そ一時間もたつと、隠居は『も一宜しいから、休め』と

いひながら、『大分涼しくなつて来て、汗も何處かへ行つて仕舞つた』
といひますと、小僧は、うらめしそうに、『みんな私の身體に来て仕
舞ひました』と答へました。だれでも、皆人の子であるのに、かば
かりの事をさせるのは、慈悲深い主人ともいへません。

五二 唐崎の夜雨

京都の人が、伊勢の太神宮に参詣するとて、出かけたが、往
復七日もかゝれば、十分であるのに、凡そ五六十日もたつてから、
やつと還つて来ました。すると、親爺が大きに腹を立て、『家にはい
ろく用事もたまつて居るのに、どこを、うるく、今まで遊んで
居たのだ、大抵程のあつた者じゃないか』といひますと、息子は

「あまり打續いて、天氣が宜いものですから、しばらく江州に逗留して居ました、」親爺は、いよ／＼怒り、「人を馬鹿にするな、失禮千萬な奴だ」といひながら、手にしたる烟管をふり揚げて、打ちのめそうとしますと、「何に本當です、決して偽などは言ひません。昔から音に聞いて居た近江入景の一つ、唐崎の夜雨といふ奴を、見て来て、話の種にしようと思つたのであります。」

五三 破土瓶

二十四孝の郭巨は、母を養ふ爲に、其子を生埋にしようと思つて、地を掘つたところが、金の釜が出て來た、その上には天孝子郭巨に賜ふと書いてあつて、その爲に、家も富み榮へるやうに成つたとい

ふことを聞いて、或る貧乏人が、おれも一つやつて見ようといふので、ある夜、赤子をかつぎ出して、裏畑を掘りちらしますと、二三尺の深さに及び、忽ち鍬の先にがちりと當つたものがあります、「サ、兼ねて望んだ通り、金の釜に違ひない、大願成就」と喜びながら、あはて、家にかけて込み、火をつけて來て見ますといふと、破れた土瓶でありました。そこで嘆息して言ふには、「ヤレ／＼世が澆季になると仕方がないものだ。」

五四 鼠

ある人が、途を歩るいたところが、鼠の死んだのがありました。そこで、丁稚に向つて、「これは乃公の生れ年の干支だから、丁寧に

拾つて行つて、家に歸つたら埋めてやれと言いますと、丁稚は『マ
鼠だから善いが、貴方の歳が、午か丑であつたら、何様なさいま
す。』

五五 赤壁賦

ある田舎の學者が、人の家に寄宿して居て、近所の小供に素讀を
教へて居ますが、ろく／＼字を知らぬところから、賦の字を賦と讀
みます。ある晩のこと、盜賊がそつと窓の前に來て、中の様子を伺
つて居ますと、文章軌範でも、教へて居るものと見え、前の赤壁の
賦と大聲に讀み立てましたから、『これは大變』といひながら、ひそ
／＼と立ち去り、後の庭の方へ廻はつて、二三十分間待つて居ます、

又ぞろ、聲を改めて、後の赤壁の賦と讀み立てましたから、膽つぶ
る／＼ばかりに驚き、『これでは、今晚駄目』と思ひながら、『おれが行
くところを、みんな知つて居やがる。こんな先生を家にさへ置けば、
狗も何にも畜ふには及ばない。でもマー、不思議だナ。』

五六 晝睡と周公

ある漢學塾の先生が、晝睡が好きで、夏の長い日は言ふに及ばず、
冬の短い日でも、火燵へもぐり込んで、必ず晝睡をします。そのく
せ、門人どもには堅く禁じて、『おれは夢に周公を見る爲にするのだ
から、善いとしたところで、貴様たちは、必ず爲しては可けない。
朽ちたる木は彫るべからず、糞土の牆は塗るべからずといふことが

あるのを知らないか』と言つて、ひどく叱ります。すると、或る日一人の門人が、晝睡をしましたが、ふと先生に見付かりましたものですから、『私も夢に周公を見る爲であります、』と申しますと、先生は『もし本當に、周公を夢みたのなら、何と申されたか、話して見ろ』といはれました。弟子は『私は周公に御目にかゝつたところが、貴様の師匠には夢にも遇つたことが無いと申されました』

五七 吉良義英の二百年忌

『雪は消えても消え残る名は千歳の後までも』と歌はれた、泉岳寺四十七士の墓所で、ある時百年忌の大法事を行ひますと、吉良上野介の墓では、二百年忌を同時に行ひました。それは何故かと試に聞

いて見ると、『柴部屋で見付られたが、百年目といふぢやないか、それで百年に百年で、二百年忌サ。』

五八 犬の歳

ある人が、大食であるところから、先づ一寸したところで、蕎麥を十、鰻飯を三つ、玉子を十もやらかします、傍に見て居る人達は驚いて、いろ／＼聞きほじり、終に何の歳だと聞いて見ますと、犬歳だと答へました。『それならまだしも幸福だ、若し虎の歳でもあつたなら、乃公様達までも、してやられて仕舞ふだろう。』

五九 謡の感應

牛の吼えるやうな聲で、歌ひながらも、自分では大天狗のつもりで、誰にでも謠を聞かせたがる隠居がありましたして、「乃公が歌へば、妙機神に通ずといふところから、きつと感應がある、今に見さつし」と常に口癖の様に言ひふらして居ました。ある日、自分の師匠や友だちなどを呼びあつめて、鉢の木を歌ひ、「あゝ降つたる雪かな、如何に世に在る人の、面白う候ふらむ。それ雪は鷲毛に似て飛んで散亂し、人は鶴毳を着て起て徘徊すといへり。されば今ふる雪も、も」と見し雪にかはらねど……』とやつて居ます、さても不思議、一天俄に寒く曇り、雪がちらちらと降り出しました。から、隠居の得意思ふべきばかりであります。すると、一人の客が、「何に別に不思議はないさ、乃公がある時、熊坂をやつたら、其晩果して盜賊が這

入つて来て、しとたま財物を取られたことがある。』

六〇 養老湯

ある山寺の腥さ坊主、玉子酒が好きで、自分で養老湯などいふ名まで付けて、寒き冬の夜ごと、必ず聞こし召されます。だが。小僧にはそれといはないで『薬だからといつたとして、誰にでも利くとは行かない。この養老湯は、年寄には利くが、若い者が飲むと、眩度毒に中つて死んで仕舞ふものだから、貴様は香でも嗅いで行けな』といひ置きました。ところが、この小僧なかく喰へない狡猾者でありましたから、或る日、和尚の不在に、徳利の酒をすつかり打ち明け、玉子酒をしたゝかにこしらへ、みんな飲んで仕舞ひました

が、この後で和尚が常に珍重して居た樂焼の大茶碗を石に投げつけて粉微塵にこわして仕舞ひ、和尚の歸つて來る足音が聞こえると、大聲を擧げて、わーく〜と泣いて居ました、和尚は這入つて來て、何をしたと聞きますと『貴方の御不在に、門前の花賣の子供と角瓶をしたところが、和尚様が御秘藏にされて居る茶碗を破りましたから、申譯もなく、いつそ死なうと心を決めて、毒酒までみんな飲みましたが、まだ死に切れません。』
一件和南の世にあり

六一 ためし斬

ある侍が、一口の名刀を買つたが、その切味を試して見たくて、堪らないところから、河原へ行つて、乞食小屋を尋ねまわり、一人

の乞食にむかひ『貴様に百兩くれるから、命を捨て、この刀の切味を試さして呉れる』といひますと、乞食はしばし考へて、『半殺にして、五十兩といふ事には出来ませんか。』

六二 灸の皮切

ある家の亭主が、醫者の勸告に従ひ、灸を据えることにして、小僧に爲せますと、どうも熱くて堪らぬものと見えて、呻つたり、喚いたりします。小僧は『これは、皮切ですから、今少し辛抱しなさい』といひますと、亭主大に腹を立て、『エー、氣の利かぬ奴もあるものだな、皮切は何故後へまわさぬ。』

六三 雪

七十八

夕ぐれの程から、北風さむく吹いて、雪がちらく降りはじめ、寒さいや増して、厚き布團の中も、さながら水の如くになつたものですから、主人はふと目を覺まし、下部を呼び立て、滅相寒いことだ、どの位雪が降つたか、見て參れと言ひ付けました。そこで、下部は應々と返事して、戸を明けて出た様子であつたが、なかく歸らない、一時間二時間と、だんく時が過ぎて、とうく夜が明けて仕舞ひました。主人は、どうしたことかかと、聊か心配しながら、椽側に出て、しばしば雪の朝景色の美しいのに見とれて居ますと、例の下部はさまく疲れた様な風で、足を引きずり、ぶるく慄へ

ながら歸つて來ました、主人は取り敢へず、今まで何をして居たのかと尋ねますと、下部は『何をして居たかとは、情ないぢやありませんか。どの位、雪が降つたか見て來いと仰てありましたから、野越え、山越え、降り積つた地面の廣さはどの位かと、四五里は駆け廻りました、まだ分らず、その中、腹が減つて耐り切れず、一先づ御知らせに戻つたのであります。』

六四 壁に耳

『オイ權太兵衛さん、何を仕て居なさる、』と、一人の若い樵夫が、畑を耕してゐる老年の百姓に尋ねたが、權太兵衛は聞こえぬかして、黙つて返辭をしません。また重ねて尋ねましたが、それでも空吹く

七十九

風と聞き流し、一言の答もない、若者はあかしく思つて、再三再四尋ねると、お爺さんやつと面をもたげて『それほど聞きたけりや、仕方が無い、どれ話して聞かすべし、マ、此處へ來なさい』といひますから、樵夫が其側に行きますと、お爺さん耳に口を寄せ、小さな聲で『豆を蒔くのだ』といひました。若者はあんまりをかしいから、笑ひながら、『それ位な事、何も内密で話すにも當るまい』といふと、お爺さん澄まし込で、『兎角若い者は、何にも知らぬから困る壁に耳ある世の中のもの、うつかり大聲でいふと、鳩や鴉に聞かれてみんなほじくられて仕舞うからよ。』

六五 贗物の蜈蚣

ある人が、犀角を胴籠の根付けにして、珍重して居ましたが、人さへ見ると、自慢して言ふには、『一體犀角といふものには、贗物が多いがこれは、正の物であるから、どんな毒虫でも、凹ますことが出来る』といひました。そのとき、丁度蜈蚣が青盤の上を這つて來ましたか、側に居た人が、『どうです、一つ試めして御覽なさい』といひます。そこで『これ御ろうじ』といふので、押へ付けて見たところ、一向利目が無いばかりでない、蜈蚣は大に怒つて犀角に噛み付きました。一座の人々はおかしくて堪らず、くつくと噴出さうとすると、其人はあきれたやうな顔をして、『これは、蜈蚣の方が贗物であるからだろう』

六六 暗がりの行燈

ある人が酔ばらつて、夜遅く歸て来ますと、玄關に有明の小行燈がありましたが、それと知らずに、蹴からかし油はあたりに飛び散らばり、障子や畳の上が、大變に汚れました。そこで、大に怒り、下女を呼び立て、叱つていひますには、『何だつて、こんな暗がりに行燈を置いて、人に撞き當らせるのだ。』

六七 付木

ある人が、夜中に起きて、書生を呼び、早く付木を持って来いといひました。書生は、寐ぼけながら、手さぐりに、心おぼえの處々を

搔き廻はして見ましたが、どうしても見付かりません。しかるところ主人が早くくとせき立てますので、大に腹を立て、『貴方あんまり御無理ぢやありませんか、この暗いのに、何が見えませう。それよりか、火をつけて来て、見せて下されば宜いのに。』

六八 あはて者

主人が、小僧を呼て、『用があるから、何某の處まで行て来てくれろ』といひますと、諾と答へるや否や、何の用事か聞きもしないで、飛で行つて仕舞ひました。しばらくして歸つて来ましたから、主人は『飛上り者め、用も分らずに行つて、口上は何と申して来た』といひますと『幸な事には、御不在で御座いました。』

六九 禁酒

ある人が、他家に行きましたところが、何か祝事があつたと見えて、酒盛の真最中でありました。主人は取り敢へず、杯を差して、「一杯やらかし玉へ」といひますと、早速傾けながら、時に面白いことがありますよ。私は、この頃立願することがありましたから、三年禁酒することにしました。考へて見ますと、まことに心細い次第であります。すると、隣の者が飲酒家が、晝も夜も、一滴も飲まぬといふと、とても堪らへられないのみならず、動もすれば、病氣が出る。そこで、夜は飲まずに、晝だけ飲み、三年の處を六年にすれば、可いぢやないかといひますからこれは至極名論だと思ひまして、

其通りにすることに決めました。といひますと、主人はしばらく考へ、「成る程、それも善いが、まだ足りないところがある。いつそ、晝も夜も飲むことにして、その代、六年を十二年に延ばしては何様だア。」

七〇 危ない石

二人相對して、碁を打つて居ますと、二三人その周圍に集まり、黒白の石が入り亂れ、鳥と鷹とが喧嘩してる様になつたのを、外目もせず眺めて居ます。すると、一人が、「あの隅の石が危ない〜」といひますから、當人が能く見ましたところが、ちつとも危なくありません、「そこで何故か」と聞きますと、其人は、碁を知らない者

と見え、『何に下へ落つところそうに成つたからです。』

七一 盗賊か俳諧師か

サー／＼皆様御覧じませ、東坡巾に被布の姿、わざとひねくつたところが、俗中の俗で、『初雪や、犬の足跡、小落雁』などいふやうなことを、如何にも勿體らしく呻り出す、これが世に謂ゆる俳諧の宗匠であります。この俳諧師の一人が、この初雪の降つた日に、『いざさらば、雪見に、ころぶ、處まで』といふので下部を一人召し連れ、寒いのに、御苦勞にも、のこ／＼と大路の雪を蹴立て、出かけた。夜になつて、同社の者の處に立ち寄り、幸にも二三人期せずして相會したといふところから、百韻といふやつを作りはじめ、

やつこらさと仕舞つて『サー還ろう』といふと、すてに真夜中過ぎ、今ていへば午前二時ごろであります、こゝに不平で堪らぬのは、下部でからに、何かぶつ／＼分らぬことを眩しながら、主人の伴をして家路に歸ります。すると、小山の如き大男が、或る家の牆の側にぬつと衝立つて居ます、宗匠大に膽玉を潰ぶし、後を向いて、下部に向ひ、『あれは何だろう』と申しますと、下部は大きな聲で、『この寒い夜遅くまでついて居るものは碓な奴ぢやありません。泥棒でなけりや、宗匠でしよう。』

七二 米の價

むかしの大名など、何事も御存なく、至極呑氣なものであります。

或る日、御老中の屋敷に、二三の大名衆が集つて、いろ／＼な御話を成されますと、主人公、「時に今の米の價は何位なもので御座ろう」と申されます、互に顔を見合せて、返辭をなさるものもありません。その時、ある一人の大名が、「左様五十八文だと承知して居ます」と申されたから、御老中は、「日ごろ經濟に心を用ひ、下情に通ぜられて居るからだ」とて、大きに譽め立て、爲に面目を施して、御歸りになり、此事を御話しなさると家來ども、いづれも「恐悦に存じます」と申し上げました。殿様は、そこで、「乃公も、實は知らなかつたが、昨日物見に上つたとき、路行く人の話をして居るを聞いて承知した。だが、その五十八文といふのは、百石の價か、千石の價かどうぢや」

七三 珊瑚の緒じめ

ある殿様の胴籠に、珊瑚珠の緒じめが付いて居ました。すると、或る時、家老の一人が見て、さも欲しそうに大層賞めそやしたものですから、さらばとて、「これは乃公の秘藏にしたものだけれども、それ程までに申すなら遣はさう」とて下し賜はりました。そこで、家へ還つてよく／＼改めて見ますと、贋物に違ひない、こんな物なら、頂戴するまでも無かつたとおもひ、或る時、折につれて其事を申し上げると、殿様は「さればさ、何と能くも贋せたものでは無いか、だから乃公は今まで秘藏にして居たのぢや。」

七四 夢中の酒

ある酒好の男が、久しく貧に苦しめられて、飲まずに居ましたが、ある夜の夢に、人から一升徳利に入れた伊丹の名酒を貰ひました。そこで、烟をさせようといふので、妻を呼びました、ところが、何か仕事をして居るものと見えて、なか／＼出て参りません。あのれ、何をして居やがるといふので、起ち上る機会に、徳利が倒れて、酒が壘の上へ流れたと思ふと、夢が覺めました。「あゝ、悔しい。そうと知れば、冷でやらかせば善かつたのに。」

七五 如是畜生發菩提心

御寺の庫裏かり禰をあぶる烟がたなびいて、卵塔場には赤兒のいしめが乾してあるといふ濁世惑亂、さても、情ない今の世の中、坊主どもの腥いのは、當り前の事と見えませす。こゝにある山寺の坊主が、水滸傳の鼓上蚤時遷もそこ退けといふ手並で、あろう事か、隣の家いへの鶏にぼりを盗ぬすて、首くびを捻ねぢつて、ひねり殺した上で、毛けをむしり初はじめました。この時折悪しく、檀家だんかの隠居いんきょが、のこ／＼やつて来たものですから、あはて、袈裟けさの下したに死しんだ鶏にぼりを押おしかくし、そしらぬ顔かほをして、澄すまして居ゐました。すると、其人そのひとのいふには、『あり難がたき御佛みほとけの教しよでは、五戒ごけいの中ちゆうにも、殊ことに殺生ころそを戒いしめ玉たまふといふのに、紫衣しゐのやんごどなき御身みみに、かゝる真似まねをせられるのは、近おほごろ心得こころえがたき次第しだい、何か譯わけのあることで御坐ござらう、いざ承うけたまはらむ』と、

相
招
俵

九十二

一本まゐらせると、流石は賣僧のことでありますから、「ヤ、見付けられたか、イヤサ、これは此方の事、」オホンと仔細らしき咳拂ひ一つやらかして、「イヤナニ、世は澆季に相成つて、こちらの宗門も大分衰へたと申すもの、決して歎くにも及びません御覽しましたらうか、拙僧の法力といふでも御坐るまいが、無知無情の鶏までが、佛法の有り難いのを能くく感じたものと見えましてな、いつしか發心し、わざく髪を剃つて呉れと願ひ出ましたものだから、今しもかくは頭の毛を少しばかり剃りかけてやつたまでのこと、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、如是畜生發菩提心。」

七六 學問の用

ある人が客人に盥鉢を御馳走するに就いて、臺所へ、薬味にする胡椒を取りに行つたところが、紙糞がいくつもあつて、上に何とも書いて無かつたものだから、探し出すまでに、一方ならず骨を折りました、そこで息子を呼んで「何でも糞には字を書いて置かないと不可、學問して字を習ふのも、結局こんな事に用ひる爲だ」とて散々叱り付けました。やがて、客が歸つて、夜になると、親父さんは麻の蚊帳の中へ這入つて、寐ました。すると、馬鹿息子先生、大きな筆で、墨くろくと、蚊帳の上へ、下の如く書きつけました、「此中に親爺あり、」

七七 笑ひ事ぢや無い

九十三

盗賊が、ある夜壁を切り抜いて、或る家へ這入りました。この家はむかし、可成な財産家であつたようですが、今は零落して、見る影もなくなつたのであります。そこで盗賊は押入や引出を掻き廻し、長持をこぢ明け、葛籠の底まではたいて見ましたが、扱て無いものは無いもので、出で来るのは塵芥ばかり、金などはありそうにもしませんが、盗賊はまだ中々思ひ切れないものと見え、幾度となく探がして居ます。主人はふと眼をさまし、前の程より夜着の袖から覗いて居ましたが、餘り可笑いものですから、覺えず吹き出して笑ひますと、盗賊は大に怒つて、『あのれ人を馬鹿にしやがつて、笑ひ事ぢやないぞ。』

七八 二疋の犬

赤斑二疋の犬が、夜、檐下に寐て居ますと、主婦の聲で頻りに呼びたてますが、面倒臭く思つて、起たうともしぬせん。すると、赤が勸めて、『往け、きつと何か呉れるのだらう』と申しましたから、斑もやゝ心動き、とうとう起つて行きました。が、しばらくすると、さも面白くないやうな顔付をして、戻つて來ました。赤は氣の毒に思ひ、どうしたものだと聞いて見ますと、『案の如く乃公に徒勞骨を折らした、小童の尿の伽に呼んだのサ』

七九 靴の價

男二人、久しく交際をして居ますが、性格の違ふこと夥しい。一人は暗がりから牛を引き出すやうな氣の長いのに引きかへて、一人は油紙に火の付いたやうなせわしない質の人であります。ある時、二人遇つたところが、いづれも新しい靴をはいて居ます。そこで、氣の短い方の男が、先づ口を開き、『貴公の靴はいくらしたか』といひますと、氣の長い方の男は、わり合ふ椅子に腰をかけ紐をといひ片つぽの靴を抜き、二三べん裏返しなどして、『これか、これはな、もうと一圓五十錢だ』と申しました。氣の短い男は、自分のにくらべて、そゝ悪くもないのに、價は半分ばかりであるのに驚き、これは屹度買はしに遣つた使の男が、中に立つて、誤魔化したに相違ない、イヤ太い奴だといふので、この下部を呼び立て、榮螺のやうな拳骨

を食はさうとする一刹那、氣の長い方の男は、今しも又ぞろ片つぽの靴を抜きおはり、『オゝ君、これも一圓五十錢だよ。』

八〇 祝の贈物

ある位の高い役人年久しく職をつとめ且つ人望もあつた爲め、ことし六十の祝をしようといふ時、部下のものは金を出し合ひ、この人が子の歳であるといふところから、金の鼠大きさは本物位なのを、こしらへて贈りました。すると、役人先生大に喜び、此辱なきを謝した後、『手前の家内、來年六十になりますか、この時は何を下されるか、この分では、定めし純金の大牛と來るべき筈ぢや、家内は丑の歳ぢやからな』

八一 小川の水

ある商家の息子、年は漸く二十一二であるが至極篤實で、朝起きてから夜寐るまでといふ者は、帳場に陣取り、帳面をくりひろげながら、算盤をばちつかせて居て、石部金吉もかくやとばかり、料理屋待合などいふ如何はしい處へはついで足を踏み込んだとがありません、そとて両親は大層可愛ゆがつて居るものゝ、子に甘ひ習ひとして、もし病氣でも起しては、かけ代へのない一人息子、それこそ大變といふところから、ある日それとなく、ちと洒落れた遊びもしろと勧めました。すると、息子は老翁の謠言と思つて、いつか承知せず。あたら耳を汚したといふところから、表に流れて居る小川へ

行つて、耳を洗ひました。その時、隣の息子は、之を見て、『何をするのだ』と聞きまますから、前の次第を話しますと、急いで其家に這入つて、土瓶を持ち出し、流の下の方に行つて、一ぱい汲み上げました。あまり可笑しいから今度はこつちから、『何をしなさる』と聞きますと、『家の親父は頑固で困まるから、少しは直る様に、これも、飲ますのぢや』

八二 鼠の眞似

名たゝる大盗賊がありました、その手下の者どもに、忍びの術を教へて言ふには、『若し人の家に忍び入つて、家の者に物音を感づかれたときには、決して逃げ出さずに、猫か鼠の聲をして居るが宜

い。それでも、可けないときには、兼ねて用意して持つて行つた蝦の殻を噛んで居るのだ。すると、これは盗賊でないと思つて、其儘にして置くに違ひないから、その時そろ／＼と仕事に取りかゝるのぢや』と申しました。手下の者ども、謹て之を聞き、或は猫の聲色をしたり、或は鼠の鳴き眞似をします。その中、大蝦の殻を噛んで聲を出すことが上手であつて、外の者はいくら眞似しても及びません、すると、頭は『聲は、それで可いけれども、まだ可けない。本當に鼠が、蝦の殻を噛むのなら、寐ころんで遣らなければならぬ』

八三 減らず口

形ばかりなる墨染の衣をつけた乞食坊主が、勸化に出て、何やら

分らぬお經を口にしながら、儒者の門の内へ、のこ／＼と這入つて行くと、主人の儒者先生が、態々出て来て、『コラ聖賢の門前に立つて、夷狄虚誕の言を誦するは、不埒極まる奴だ、早くうせろ、出ないぞ／＼』と大聲に叱りつけました。すると、坊さんわ莞爾笑つて今度は論語に節をつけて呻り出し、根が生えた様に衝つ立つたまゝ、なか／＼立ち去る氣色も見えませんが、主人も仕方なくて、手に一ばい布施米をやり、『ヤイ糞坊主め、貴様はまことの巧言令色の徒者であると』申しますと、坊主、ぬからず、布施米の少きをかち顔に、『オット待つたり、鮮矣仁』

八四 媒人の上手

さる處の娘が、モ一十五になつて、文句は古いが、花の顔、月の肩、緑の黒髪鬘鬘けて、見ぬ世の昔揚貴妃、李夫人もかくやどはかり、願る付の別嬪であるから、十分立派な婿をといふので、八方に手くばりして、探がして居ますと、媒人がやつて来て、『やさしくて、大人しくて、もう一つお負けに金持ちで、年は二十四五にもなるかといふ好男子があるが、如何です』といふので、『それは好かろう』と、直ぐに手筈を取りきめ、いざ見合となると、こはそも如何に、外には餘り言分もないが、折角のお婿さん、卅五ぐらゐの年だから堪らない、娘の父親は媒人を呼びつけて、大に怒つた様子で、『虚をつくにも、大抵程のあつたものぢや無いか、せめて男の年が女の倍ぐらゐでもあればだが、倍の上五つも違つちや、とても御話に成り兼ね

2, 8
15 13 10 5

るから、この縁談は一先づお断りだ』といふと媒人先生平氣な顔で『へー宜しうげす、ぢやモ一五年待つて頂きませう、するとお婿さんが四十で、宜うがすか、お嬢さんが二十で、ね、御注文通り半分違の年合になりませう。』

八五 牆の價

あるとぼけた男が、町を歩るきながら、古道具の店へ立ち寄りましたところが、古い尺入が一つあります、それを取り上げ、ひねくり廻はし、指を其口に差し込んで、その大きさを吟味して居ましたが、堅く這入つたものと見えて、いくら引張つても、出て来ません。そこで、仕方がないから、之を買取り、家へ歸つてから、打ち破つ

て指を抜かうといふので、價を聞きますと、そこが商賈人ですから、殊の外高く價を言ひましたが、今さら仕方がなく言ふ通に金を拂ひ、指の先にぶらさげた儘、家の方に歸ります。その途に、立派な家があつて、風ゆるやかに梅の香を吹き送り、かすかに琴の音が聞こえます。この男、又ぞろ心動き、牆を押しこわし頭を衝き出して、覗いて見ますと、簾が垂れて居て、賑やかに且つ媚めかしい笑聲が、聞こえました。したがしばらくすると、音もせずなりました。そこで、首を引き戻さうとした處が、牆の爲に押へられて、なか／＼取れません。覺えず、大聲を揚げて援けて呉れといひますと、その家の主人、晝盜賊でもありと思つたから、屈強な下部二三人を召し連れて、矢庭に縛り上げやうとしました。すると、其男は、あはて、

『この牆はいくらだ』』

八六 馬の稽古

ある侍が、馬術の稽古をするといふので、日ごと馬を引き出しては、乗ります。ある日馬が何にか驚いた者と見えて、電の如く急に駈り出して、いくら留めても留りません。そこへ、丁度出入の男がやつて来て、『旦那今日は何家へ御出なさる』といひますと、侍は馬の上で、『この様子では、何處へ行くか乃公には分らぬ』

八七 屁

ある殿様が、年若く、物ごとに遣り放してあります。ある時、便

ある殿様が、年若く、物ごとに遣り放してあります。

あつた。あつた。あつた。

所へ行かれたところが、手も洗はずに、さつさと立ち去られた。手
水番をして居たお小姓は、何にか御氣にさわつた事があるのかと思
つて、小姓頭に伺つて、謹慎をしようと思いました。すると、殿様は
大に笑つて、『何にあれば仔細ない事で、屁をひりに参つたのぢや』

八八 馬鹿律義

どこでも、きまつた者で、家令とか、家扶とかいふ者は、いやに
鹿爪らしく、馬鹿律義な奴を善いとしたものと見えます。ある大名
華族の家扶も、矢張それでありますが、人並すぐれて見受けられま
した。ある時、乳母が生れて五六月ばかりたつた若殿を抱いて、傍
へ参り、『マ―御寛なさい、よく御笑なされて御可愛いとツてはあり

ませんか。一寸あいをなされ』と申しますと、家扶は恐入つて、辭
退をします。『マ―そんな事をいはずと、一寸御やりなさい』と申し
ますと、さらばといふので、二三尺も後に飛びさがり、蛙の如く兩
手を壘の上に付いて平張り、大きな聲をして、『恐れながらバァー、
恐れながらバァー』と申しました。すると、若殿はあつけに取られ
たものと見えまして、笑ふどころか、乳母の肩にしがみ付いて、泣
き出しました。

八九 盲者の提燈

盲者が、何が所用あつて、隣村に行き、夜になりて歸ろうとして、
提燈を貸して呉れといひましたから、『盲者に提燈なんか要るま』と

あつた。あつた。あつた。

申しますと『イヤナニ、人が突き當らない用心です』といふので、成程尤だと思つて貸してやると、盲者は喜んで、それを黙けて行きましましたから、誰れも突き當らないで、モト一二町といふ處までやつて來ました。ところが、だしぬけに突き當つたものがあるのです、むごくも雨の後の泥濘の中にはめられましたから、大きに怒つて、見えもせぬ目をむき出し、『おまへさん目明のくせに、この提燈が見えませんか』といふと、『馬鹿いへ、按摩め、貴様の提燈は消えて居るぢやないか。』

九〇 すゝ掃

世の中は追々いそがしき師走の一夜、ある富者の家へ盗人が這入

つたが家内のものがそれと氣付いて、目をさまし、取り押へようと騒ぎ出したので、逸早く跡しら波と逃げて仕舞ひました。それと知らないものだから、何處かの隅に匿れて居ることゝ思つて、床の下から便所の中まで残る限なく探がしたけれども、分りません。すると、お内儀さんのいふには『ナニ、家の中に居るんだから、打遣つて置くがよかるよ。もう二三日たつと煤掃をするから、その時には屹度出ましようよ。』

九一 京都と伊勢

むかし、京都の男と伊勢の男が、國自慢をしたところが、京都の男の方が、殆んど負けかかりました、そこで大きに怒つて、『イヤサ、

外の事は兎に角、京都は天子さまの居らしやるところだから、決して手前達田舎者の彼此いふべきところで無い』と申しますと、伊勢の男もぬからずに、『なる程大きにそうだが、先祖と子孫とはどつちが尊いものだろうと申しますから、京都の男もつい釣り込まれて、『それは先祖さ』と答へました。すると伊勢の男は、『そんなら矢張伊勢だ、伊勢の山田には太神宮さまがあるぢやないか。』

九二字を知らぬ同士

下部の男が、主人から手紙を二本受取つて、使に出かけたが、あまりに急いだ上に、元より一丁字のない節穴同然の目を持つて居る奴様だから、どれを何方へ持つて行つて好いか、丸ッ切り分らなく

なつて仕舞ました、これはしたりと、路の真中に立ち留まつて、考へて居ますと、打装の立派なお侍が、一人やつて來ましたから、悲しく禮をなしどうぞ此手紙の宛名を讀んで下さいと頼みましたが、このお侍も同様無筆であるから、いたく閉口しました。しかし真逆さうとも言へぬ者ですから、良久しく考へた後、下部に向つて『これを読んでやるのは、易い事だけれども、貴様又忘れるといけない。そこでな、那處へ参つたら、どつちでも拘はないから、取敢へず一つを出したら好かろう。それが若し違つて居ると、向ふからしてこれは私の方ではありませんと申すだろうから、其時こそ片つばの方を出せば、それで好かろうぢやないか。』

九三 ねむり薬

むかしは、粒甲丹といふねむり薬がありました。ある男が、病氣になりましたとき、隣家の友達に向つて、『死ぬるは人の定命で、致し方もなく、それ程にも思はないが、斷末魔の苦はどんなである、それが厭てならぬから、もし其場合になつたときには、しこたまかかねて聞いた粒甲丹を飲まして呉れ、そうすれば、安らかに眠むる様にして、冥途へ旅立つことも出来よう。この事は、家内にも話せないから、慮外ながら御頼み申す』と云いました。さて病は抄々しく治らず、その上、夜も眠られないで、疲勞一通てないといふところから、醫者は家内のものに相談して、例の粒甲丹を用いること

にしました。そこで折しも看病に来て居た友だち、湯に混ぜて飲ませますと、病人は何といふ薬かど聞きます。その譯をろくろく知らないものだから、これが粒甲丹だと申しますと、病人は大に驚き、舌を顔はしていふには、『ヤーモ、これを飲むように成つたかナ、』

九四 夫婦喧嘩

『又ぞろ、お株が始まつたか、あんまり仲が善すぎるから、時たまとういふこともあるのさ』といつて、近所でも留めるものがない。いつもの夫婦喧嘩も、今日はことの外劇しくなり、女が強情なところから、謝もせず、男はいよ／＼怒つて『出て失せろ』といひますと、『こんな家に誰が居るものか』といふので、一先づ部屋へ這入て

身なりをつくろひ、派手に着かざり、つん／＼と澄まして出掛けようとししました。男は、火鉢の前に胡坐かいて、煙草を輪に吹いて見るとはなしに見ますと、常さへ憎からぬ女、今日は髪の結び立て、後れ毛一すぢもなく、頸の色のくつきり白いところ、しがみ付いてやりたいくらゐ、俄に氣が代り、出すことが厭になりましたから、『去られた女は表口から出るものでないぞ』と申します。から、女は裏口に廻りますと、『そこは締りがしてあつて、鍵はおれが持つて居る』と申します、『そんなら何處から出たら宜しう御坐いますか』といひますと、『矢張去らずに居るさ。』

九五 夫婦喧嘩と盜賊

盜賊が、床の下にかくれて、夜更けて人の寝静づまるを待つて居ますと、何様いふことから起つたものか。分らないが、その家では夫婦喧嘩をおつ始め、馬肉野郎だとか、般若だとか、聞に堪へざる悪口を、思ふ存分言つた揚句、とても口先では協はぬものと思つて、氣の早い亭主いきなり、女房の横面を一つ御見舞ひ申すと、女房もなか／＼黙ては居ず、ひつ搔く、噛み付く、はては髪をふり亂して、大立廻りをやらかし、とら／＼組みしかれて、撲ぐるやら、蹴るやら、散々ひどい目に遇はしたものですから、女房はヒ／＼と聲を揚げて泣いて居ます。盗人は床の動く爲に、とても堪へ切れず、思はず這ひ出して、そつと覗いて居たが、餘りの事と見兼ねて、はかに雨戸を押し開き、中へ這入つて、兩方を取り押へ、さま／＼

に言ひこしらへて、やつと静まりましたが、夫婦のものは、今更見
なれぬ人だとおもつて、一體誰方かと聞いて見ますと、盗賊も頭を
かきく、「なる程これは乃公の出る幕ではなかつた」と初めて感付
いたものゝ、今更逃げ出す譯にも行かず、實はかくくの者である
といひますと、夫婦のものは、『それは御暇をつぶさせて、仕事の邪
魔にもなりましたらう、マゝお茶でも一つ御上りなさい』と申しま
す。盗賊は『イヤナニ、今夜はまだ一軒寄るところがあるから』と
いつて出かけました。夫婦の者は、『それは近頃御疎忽さま、又どう
か近い中に來て下さい』

九六 備前の土

ある酒好の老爺が、『乃公は別に望も無いが、死んだら、何分にも
葬つて呉れ』と申します。そこで何故かと聞いて見ます
と、『備前焼の徳利といふのがあるぢや無いか、乃公も備前の土とな
れば、いつか焼かれて徳利となり、始終酒にしみて居ることが出來
るから』といひました。その後、幾年たつた後、死にましたから、
遺言通り、備前に埋葬しました。さて孫の代になりますと、ある夜
まぎくと枕上に立ち、『どうも潤いてくゝて仕方がないから、毎日
御茶湯をもつとたつぷり備へて呉れる』といふことで御座ります。
あまりの不思議に堪へかね、巫女を呼んで夢を判じて貰ひ、死口
を寄せて貰ひますと、『乃公は最早や土となる、案の如く陶器にな
れたが、徳利になる積りのところ、何様いふものか、真違へられて

醬油盥に成つて終まつた。それで、毎日毎日渴いて仕方がなう。」

九七 女大學

ある家の嫁が、我儘で、横着で、亭主を尻に敷いて仕方がないところから、亭主は、ある日、女大學を一冊買つて来て、『マ、これでも読んで、ちつと女の道を覺えるさ』と申しますと、嫁は澄したもので、『こんな本なんぞ、妾はとうに見ましたし、手本に書いて貰つて、二三遍も習ひました。だが、これはみんな男衆のこしらへたものであるから、男の勝手に善いことばかり書いてあつて、女の爲には何の役に立ちましよう。見たくてもなう。』

九八 拾ひ物

平常は兄弟の如く睦しき友達二人、郊外を散歩した處が、何やらむ囊が落ちて居ました。そこで慾には心の缺けぬ手合、同時に馳せ出しましたが、一人はどうく先に拾つて仕舞ひました。こうなるど、争の起るのは自然の勢で、『イヤ拾つたのは貴様でもあらうが、一番先に見つけたのは乃公だからして、山分にしよう』といふと、拾つた方では、『そうは行かない、若し見つけたのが自分の者だとすれば世界の物は、すべて我が物で、そんな理窟はない』といつて、どうしても聞かないのみならず、はては撲り合を初めるまでに立ち到りました。そこへ、顔役の男がやつて来て、之を仲裁し、家へ連

れかへり、仲直りの酒を飲ませ、『喧嘩は、兎に角、一體拾つた物は、何んだか、善く改めた跡で、もう一度談合するもよからうぢやないか』と申しますから、その囊を開いて見ると、これはそも如何に、明けて悔しき浦島が玉手箱のそれにも増して、重かつたも道理こそ、石屋の使ふ槌と鑿の赤錆になつたのが這入つて居ました。

九九 筒たけのこ

隣家の竹藪から、根がはびこつて来て、筒の見事なのが、おひたしく出来ましたから、狡猾な主人は、至極幸のことに思ひ、すつかり取つて煮て食つて仕舞ひました。そこで、黙つて居ればそれ丈の事で済むのに、わざわざ使を遣り、『貴公の御宅の筒が、無禮にも拙

者方へ亂入致したにつき、ことごとく手討にしましたから、其旨御知らせ申す』といひ遣りました。すると、彼方では、『それは如何にも御尤な事で御座るが、拙者方に生き残つて居る親戚の者どもが、甚だ愁嘆して居る様子いかにも氣の毒につき、何卒死骸を御返し下され』と申し越しました。主人は、これは飛んだ事になつたと、しばらく考へて居ましたが、やがて『イヤその死骸は、こなたにて宜しき様に取計らひ、すでに火葬にして仕舞ひましたから、何にも御座らむ、たゞ着物が幸にも残つて居ますから、これなと形見に御思し召せ』とて筒の皮を箆に一ぱい、盛りあげて、還へしやりました。

一〇〇 この兒はたゞか

誰れでも、年を若く見られるのは嬉しいといふところから、五六人集つた席で、互に人の歳をわざと若く云つて、おどり合をして居ます。そこへ主人の妻が當歳の赤子を抱いて來ましたから、客の一人がどうしても其子の歳を若く云はうと思つて、『この兒の歳はたゞか』

滑稽百笑話終

明治三十五年五月三日印刷

明治三十五年五月六日發行

(滑稽百笑話)

正價金貳拾錢

著者 久保得二

發行者 福田滋次郎

東京京橋區新着町拾四番地

印刷者 石川金太郎

東京京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京京橋區西紺屋町廿六七番地

不許複製

發兌元

東京市京橋區新着町拾四番地

晴光館

衛生新書

女醫西者

極彩色美麗なる口繪あり●表紙又奇麗
賣價金三十錢郵税六錢●四六版三百頁
密封小包料八錢百里外十六錢

本書は人身衛生及疾病に關する諸問題を網羅し
其原因症候及簡易療法等を明示したる良書にし
て冊中前後の兩篇に分ち前篇に於ては人身病理
後篇に於ては生殖機能に關する樞要なる諸問題
於ては凡て問答體に親切に説明したる
事五百有餘問に及び如何に衛生上有益にして
吾人身體の機能を促進するかは乞ふ一讀御批判
あらん事を

發行所 東京市京橋區新肴町十四番地 晴光館

詩文添削 ●専ら懇篤迅速を旨とす
●規則望の向は參錢送れ

東京下谷區池ノ端七軒町壹番地 求友社

文學士 八保天 隨筆 (前篇再版)

教訓小話

獨逸文豪ノッシンケ響噺談の譯述 正價金十五錢郵税四錢
●岡田法學博士等廿名の博士學士新筆

學窓閑話

學窓にあるものゝ必極なる好書 正價金廿五錢郵税四錢
●矢部鳥田兩學士鏡花春葉外拾數名執筆

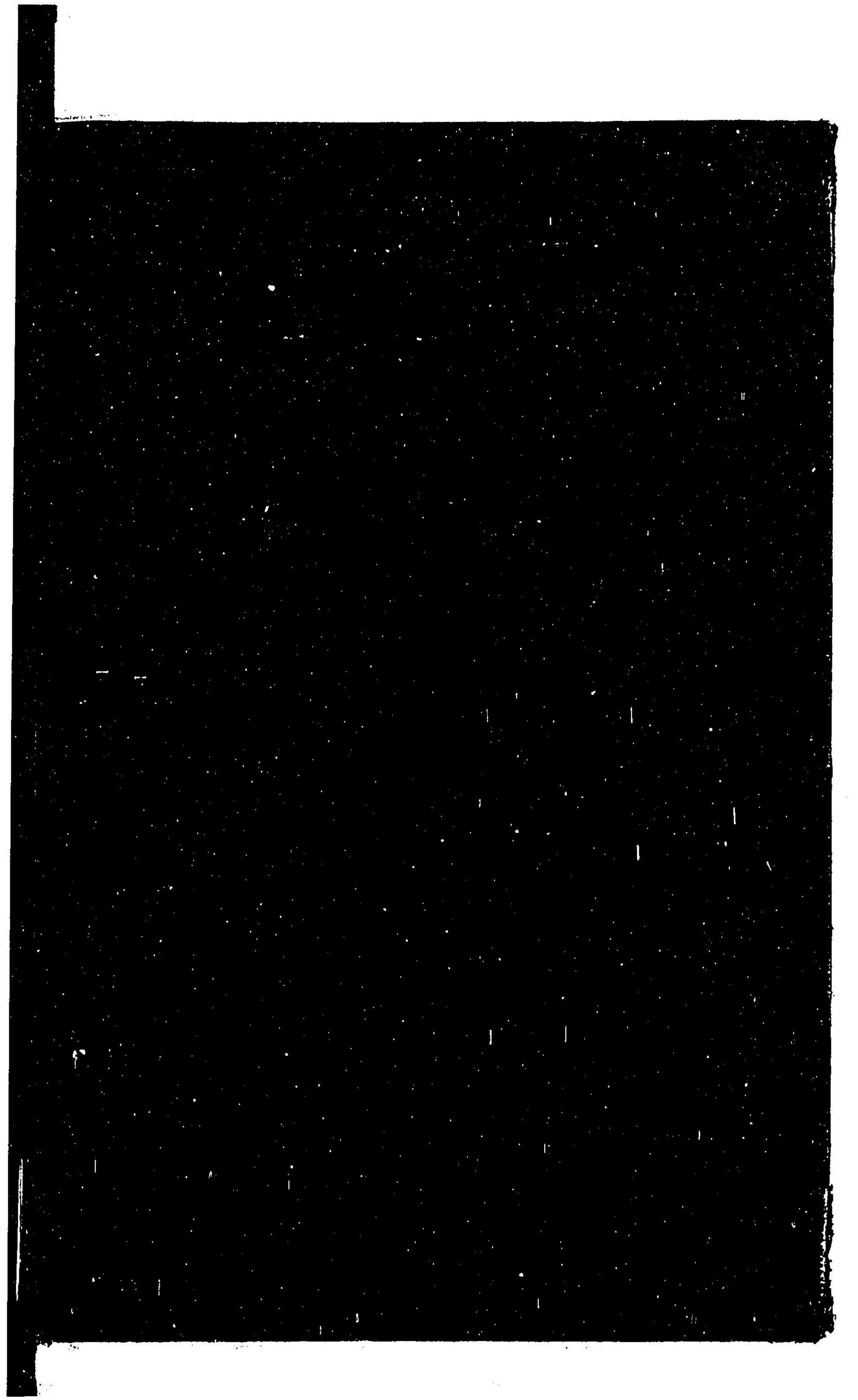
短篇 奇談 勢揃ひ

壯快な、冒險談實歴談復離談御伽話 正價廿五錢郵税四錢
●鈴木天眼 宮崎來城兩君序

再版 血達磨日記 正價金卅錢 郵税金四錢

發行所 東京市京橋區新肴町十四番地 晴光館

82
454



82
454

091709-000-3

82-454

滑稽百笑話

久保天隨／著

M35

DBO-0182

